

Impression ESL 11A




MARTIN LOGAN®

Impression ESL 11A





取 扱 説 明 書



シリアル番号: すぐに確認できるよう以下にシリアル番号をご記入ください。シリアル番号は、背面プレートの下部付近および梱包箱に印字されています。各ユニットには、それぞれ固有のシリアル番号があります。

/

マーティン・ローガン製スピーカーのオーナーの皆様へー

私たちのスピーカー作りを愛し、

その活動をご支援いただき誠にありがとうございます。

マーティン・ローガン社 製品開発チーム



エンジニアリング・ディレクター、グレッグ・ダナム



主任オーディオ技師、ジョー・ボイトコ



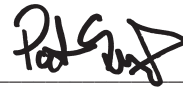
製品マネージャー、デヴィン・ゼル



上級ラウドスピーカーエンジニア、ジョー・マクラッケン



プロジェクトマネージャー、エリック・アーバン



エンジニアリング技術者、パット・シャウプ



エンジニアリング技術者、ブライアン・カービー

はじめに

おめでとうございます。このたびは世界トップクラスのプレミアムスピーカーシステムをご購入いただき誠にありがとうございます。マーティン・ローガンの静電型スピーカーは、音響技術の高度な組み合わせにより、前例のないオーディオ設計の方向性を確立しています。そのハイブリッド静電型スピーカーを特徴付けるXStat技術、パワフルなウーファー、ルーム・コレクションテクノロジー、効率性の新基準を確立した精密なクロスオーバー設計技術、フロア型スピーカーにおけるダイナミクスと精度はすべて、長年にわたる研究の成果によるものです。

CLS XStatトランスデューサーは、マーティン・ローガンが誇る静電技術の伝統に、先進の真空接合技術とMicroPerf静電パネルを組み合わせることで生まれました。Neolith™エンジニアリングチームによって開発された電気インターフェース技術は、ダイナミクスと純度を無理なく拡張し、高い基準の音響精度と能率をもたらします。また、緩やかな曲線を描いた静電パネルは、耐久性と信頼性が現在入手可能なトランスデューサーの中でもトップクラスであることが厳しい試験により証明されています。ハイグレード鋼を特注工具でパンチング加工したこの特許取得済みのパネルには、独自の静電接合プロセスを介して塗布される特殊なポリマーがコーティングされており、パネルアセンブリ内には、わずか0.0005インチ厚の膜がハウジングされています。

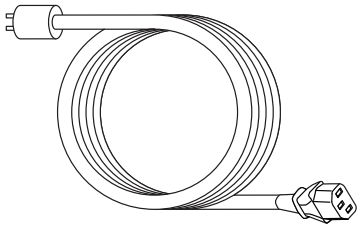
マーティン・ローガンのサブウーファーに関するエンジニアリングと研究の輝かしい遺産は、表現の明瞭さが世界でもトップクラスを誇るサブウーファーを作り出しただけでなく、新たなブレイクスルーも生み出しました。高度な増幅およびトランスデューサー設計の統合エンジニアリングを通じて、PoweredForce™ベーステクノロジーは、従来のパッシブ型ボックスシステムでは手の届かない低音のダイナミクスと精度をもたらします。さらに、ルーム・コレクションと低域イコライゼーション機能により、室内を最適に調和させるための正確なキャリブレーションも可能です。

先進的なクロスオーバーポロジータクニックを特徴とするクロスオーバーには、精度の高いオーディオグレードのポリプロピレンコンデンサー、トロイダルトランス、高純度の空芯および鉄心コイルが使用されています。この先進的なクロスオーバーポロジータクニックは、どれだけ再生が難しい音源であろうとも、微細なニュアンスを完璧に保持しながら広い範囲のダイナミクスを難なく処理することが可能です。

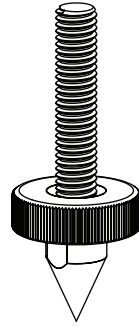
この取扱説明書では、スピーカーの取り扱い方法とその設計の背後にある哲学について詳しく説明しています。スピーカーを明確に理解することで、トップクラスの精度を誇るこのトランスデューサーから最大限のパフォーマンスと喜びを得ることができるはずです。また、このスピーカーは、長年にわたるトラブルフリーで音楽鑑賞の喜びを提供できるように設計され、組み立てられています。

目次

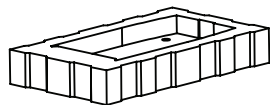
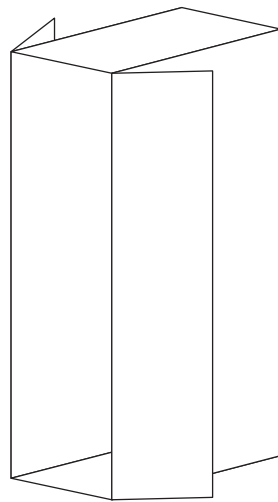
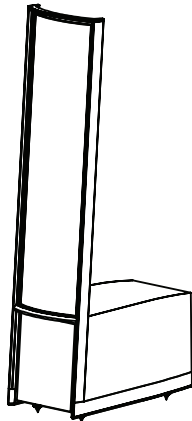
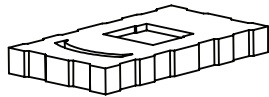
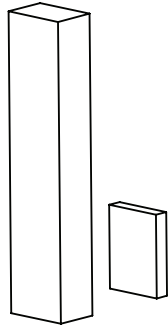
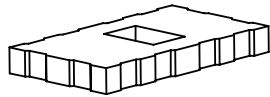
操作および接続	1	静電型の利点	11
AC電源接続部.....	1	フルレンジ駆動.....	12
信号入力部への接続.....	1	マーティン・ローガンの独自技術	13
エージング.....	1	XStat™トランスデューサー.....	13
リアパネルコントロール部および接続.....	2	CLS™(Curvilinear Line Source(曲線ラインソース)).....	13
配置	3	Generation 2振動板.....	13
リスニング位置.....	3	MicroPerf固定子.....	13
リスナーの背面の壁.....	3	真空接合.....	13
スピーカーの背面の壁.....	3	超剛性AirFrame技術.....	13
側面の壁.....	3	Powered Force Forwardベーステクノロジー.....	14
試行錯誤.....	3	アンセム・ルーム・コレクション(ARC)テクノロジー.....	14
最終的な設置位置.....	4	静電型スピーカーの歴史	15
補足的な微調整.....	4	よくある質問(FAQ)	17
音楽鑑賞をお楽しみください.....	4	トラブルシューティング	19
アンセム・ルーム・コレクション(ARC™)のセットアップ	7	ARCトラブルシューティング	20
ARC:スピーカーとコンピューターの接続.....	7	仕様	21
ARCステータスLED.....	7	一般情報	22
ルームアコースティック調整	8	保証と登録.....	22
部屋について.....	8	シリアル番号.....	22
用語.....	8	サービス.....	22
経験則.....	8	オーディオ用語集	23
ダイポールスピーカーと部屋について.....	9		
剛性の高い足による設置.....	9		
分散の相互作用	10		
制御された水平分散.....	10		
制御された垂直分散.....	10		
主要な3種類の分散タイプ.....	10		




x1



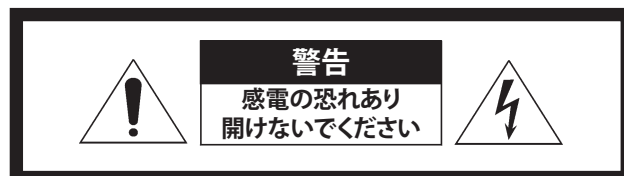
x4



- 
- 1 この説明書を必ず読んでください。
 - 2 この説明書は保管してください。
 - 3 使用上のすべての注意に従ってください。
 - 4 説明書内のすべての指示に従ってください。
 - 5 本装置を水の近くで使用しないでください。
 - 6 掃除の際には乾いた布のみをお使いください。
 - 7 通気口はふさがらないでください。メーカーの指示に従って設置してください。
 - 8 放熱器、セントラルヒーティングのレジスター、ストーブ、または熱を発生するその他の装置（アンプを含む）のような熱源の近くには設置しないでください。
 - 9 電源ケーブルは、特にプラグ付近、電源タップ付近、および装置との接続部付近で挟んだり、その上を歩いたりすることのないよう保護してください。
 - 10 メーカーが指定したアタッチメント（取り付け具）/アクセサリのみを使用してください。
 - 11 スピーカー用のスタンド、三脚、ブラケット、台は、メーカー指定のものか装置と一緒に販売されたもののみを使用してください。
 - 12 雷の発生時や本装置を長期間使用しないときは、電源ケーブルを抜いてください。
 - 13 修理や点検については必ず正規サービス担当者に連絡してください。電源ケーブルやプラグが損傷した場合、装置内に液体や物がこぼれたり入り込んだりした場合、装置が雨や湿気にさらされた場合、正常に動作しなくなった場合、または装置を落下させた場合など、装置が何らかの損傷を負った際には修理・点検が必要になります。
 - 14 電源ケーブルのプラグは手の届く範囲に置き、いつでも接続できる状態にしておいてください。
 - 15 本装置を電源から完全に切り離すには、電源ケーブルのプラグを電源コンセントから抜いてください。



- 16 警告：火災や感電のリスクを減らすため、本装置を雨や湿気にさらしたり、液体が入った物を近くに置いたりしないでください（例：花瓶などは本装置の上に置かないでください）。



注意

- ・感電のリスクを減らすため、カバー（または背面）を取り外さないでください。
- ・ユーザーご自身で修理・点検できる部品は内部にありません。
- ・修理や点検については正規サービス担当者に連絡してください。

修理・点検サービス情報

修理・点検サービスが必要な際には、カスタマーサービスにご連絡ください。カスタマーサービスの電話番号は0570-055-651（ナビダイヤル：平日9:30-17:30）です。

メールでのお問い合わせは、<https://pdn.co.jp/contact.html>までお願いします。

本装置は電磁波を発生および使用し、外部に放射することがあるため、指示に従って設置および使用されなかった場合、無線通信に有害な干渉を引き起こす可能性があります。一方で、特定の設置方法を実施したからといって干渉が発生しないという保証はありません。本装置がラジオまたはテレビの受信に有害な干渉を引き起こす場合（本装置の電源をオンオフすることで確認できます）、以下のいずれかの方法で干渉を取り除かれることをお勧めします。

- 受信アンテナの向きまたは位置を変える。
- 本装置と受信機の距離を離す。
- 受信機が接続されている電源回路とは異なる回路のコンセントに本装置を接続する。
- 販売店または経験豊富なラジオ・テレビ技術者にサポートを依頼する。



感嘆符が描かれた正三角形のイラストは、操作やメンテナンス（修理・点検）に関する重要な説明が、機器に付属している文書内にあることを示しています。



矢印の付いた稲妻が描かれた正三角形のイラストは、製品の筐体内に絶縁されていない「危険電圧」が存在し、感電のリスクがあることを示しています。



警告： 正規代理店により最初に販売された国以外でスピーカーを使用しないでください。国によって電圧の仕様が異なります。異なる電圧で使用した場合、修理に多額の費用を要する損傷が発生する可能性があります。スピーカーは、販売先の国に応じた電圧設定でマーティン・ローガンの正規代理店に出荷されています。



安全上の注意および設置概要



警告 / 注意

- 危険電圧が内部に存在します。カバーを開けないでください。
- 修理・点検については正規の技術者にお問い合わせください。
- 火災や感電を防ぐため、本装置を液体にさらさないでください。
- 異常が発生した場合には、アンプの電源を切り、スピーカーから電源ケーブルを抜いてください。
- 音声信号端子へのケーブル脱着前には、アンプの電源を切ってください。
- 静電パネルの部品に視認できる損傷がある場合は、動作させないでください。
- 定格入力以上でスピーカーを駆動させないでください。
- 電源ケーブルがAC電源に接続された状態で、スピーカー側の電源ケーブルを脱着しないでください。また、電源ケーブルがAC電源に接続された状態で、反対側のソケットをスピーカーの電源コネクタに接続しないまま放置するのもお止めください。
- ろうそくや火を発するその他のものをスピーカーの上に置かないでください。
- 液体の入ったコップや花瓶などをスピーカーの上に置かないでください。
- 液体がこぼれたり飛び散ったりするような状況にスピーカーをさらさないでください。
- 稲妻マークの付いた端子は、技能を有する人に依頼するか既製の端子を使用して接続してください。
- 万一異常が発生した場合でも、電源ケーブルはすぐに接続できる状態にしておいてください。

ご購入いただいたマーティン・ローガン製スピーカーをできるだけ早くお楽しみいただくため、以下に簡単なセットアップの方法を記載しております。いったん動作可能な状態になりましたら、この説明書の残りの情報を詳しく読むようにしてください。内容をしっかりと理解することで、トップクラスの精度を誇るこのトランスデューサーから、最大限のパフォーマンスを引き出すことができるようになります。

マーティン・ローガン製スピーカーのセットアップや操作方法について問題や不明点などがある場合は、この取扱説明書の「ルームアコースティック調整」、「配置」、または「操作方法」の章を参照してください。それでも解決できない問題については、お近くのマーティン・ローガン正規販売店までお問い合わせください。状況の改善に役立つ技術的な分析と対処方法をご提供させていただきます。

ステップ1: 開梱

新しいマーティン・ローガンのスピーカーを梱包箱から取り出します。

ステップ2: 配置

はじめに壁から60センチほど離してスピーカーを置き、リスニングエリアに向けてわずかに内振りします。詳しくは、付属説明書の「配置」の章を参照してください。

ステップ3: 電源接続(AC) (警告を参照)

可能な限り品質の高い電源ケーブルをお使いください。より優れた性能を発揮させるには、専門店での取り扱いのある高品質な電源ケーブルがお勧めです。

マーティン・ローガンのスピーカーは、静電セルに電圧を掛けるのにAC電源を必要とします。付属のAC電源ケーブルを使用して、最初にスピーカーの背面パネルにあるAC電源コネクタにしっかりと接続し、次に壁のコンセントに接続します。詳しくは、付属説明書の「操作方法」の章を参照してください。

ステップ4: 音声信号の接続

可能な限り品質の高いスピーカーケーブルをお使いください。より優れた性能を発揮させるには、専門店での取り扱いのある高品質なケーブルがお勧めです。また、スピードプラグ(Yラグ)を使うと、理想的なコンタクトで簡単に接続することができます。

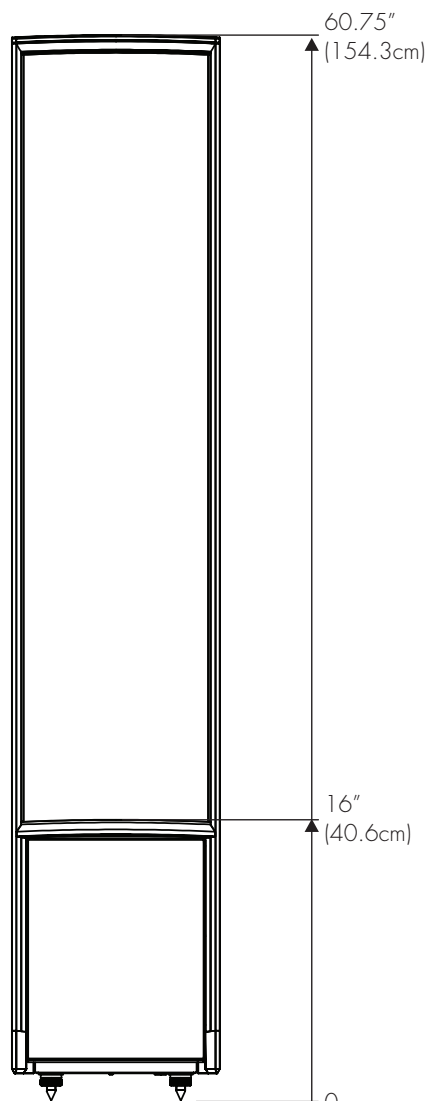
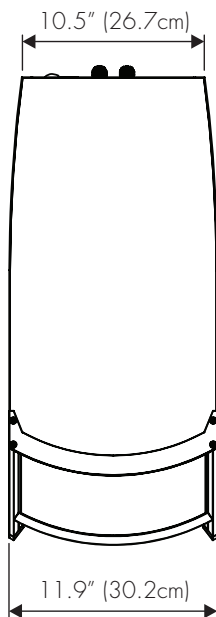
スピーカーケーブルを背面パネルの信号入力部に取り付けます。スピーカーケーブルの末端をスピーカー背面の端子に接続する際には、左右チャンネルの(+)端子に同じ色のケーブルがくるよう十分に確認してください。低音が薄く音像がぼやけてはつきりしない場合は、(+)と(-)の配線の色が左右チャンネルで一致しているかを確認し、違っていれば配線をやり直してシステムを正しい極性にしてください。

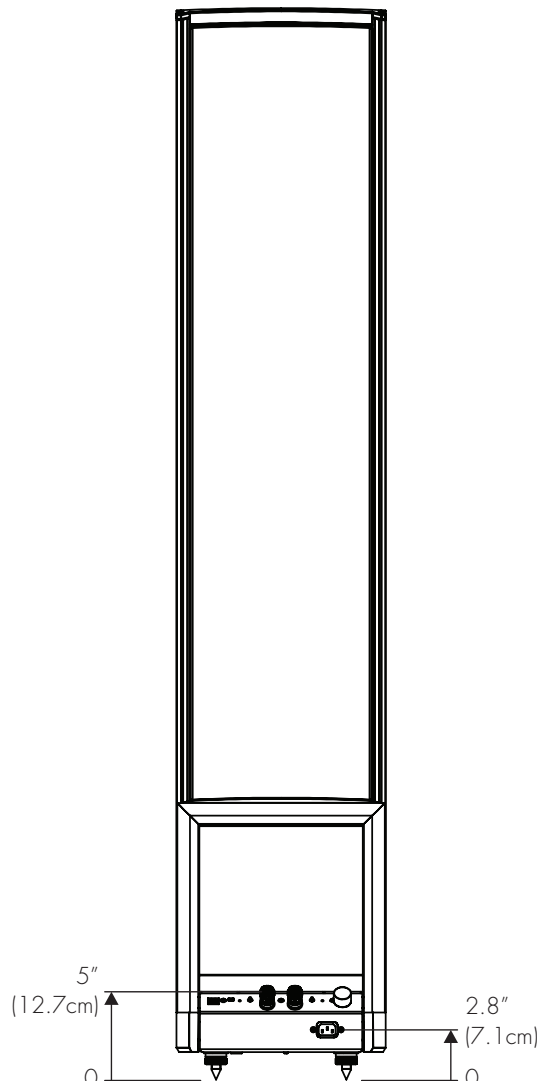
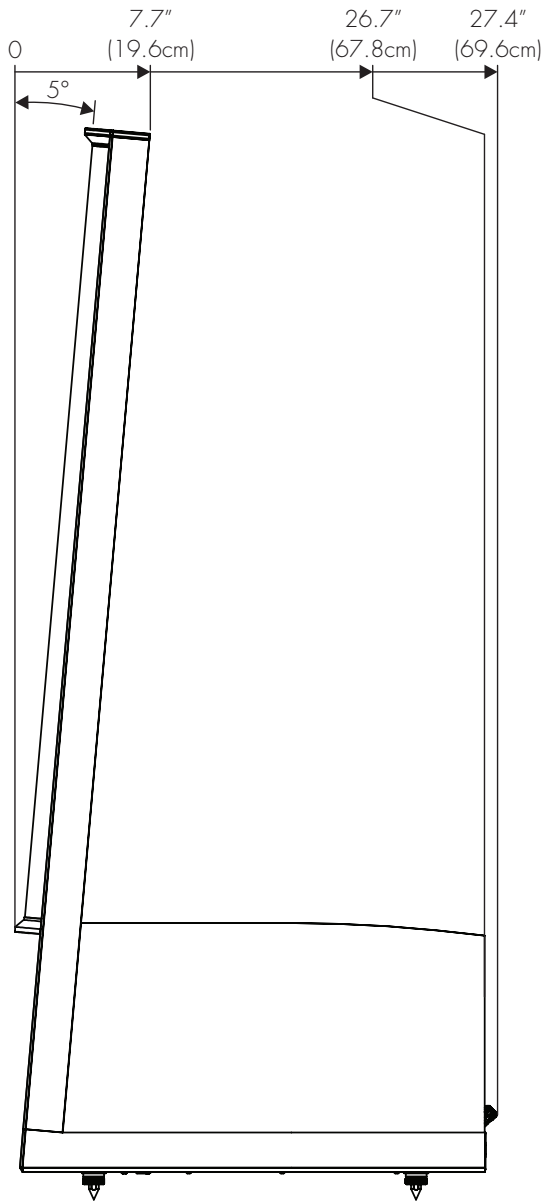
ご購入いただいたスピーカーがバイワイヤリング/パッシブバイアンプ接続に対応している場合は、説明書の「操作方法」の章を参照して、適切なセットアップの方法をご確認ください。

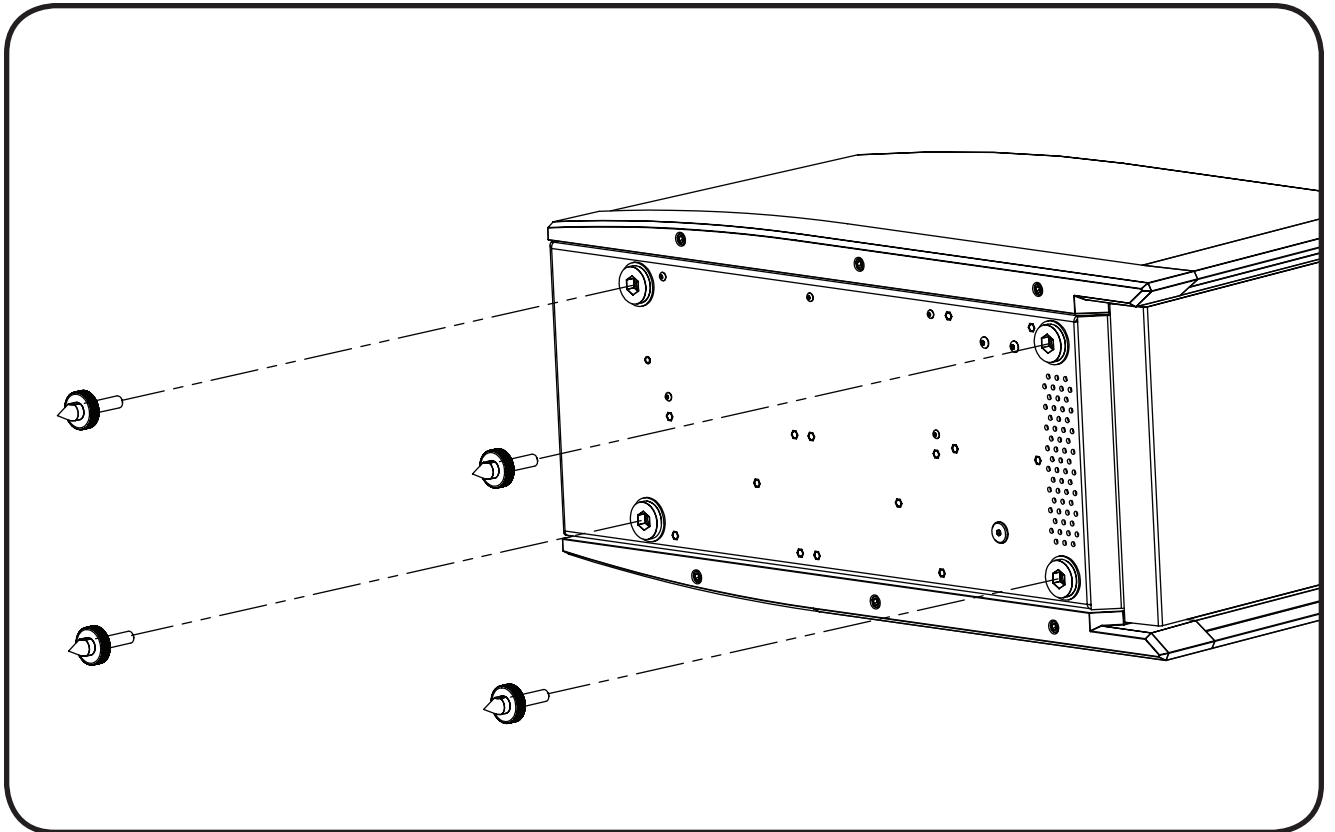
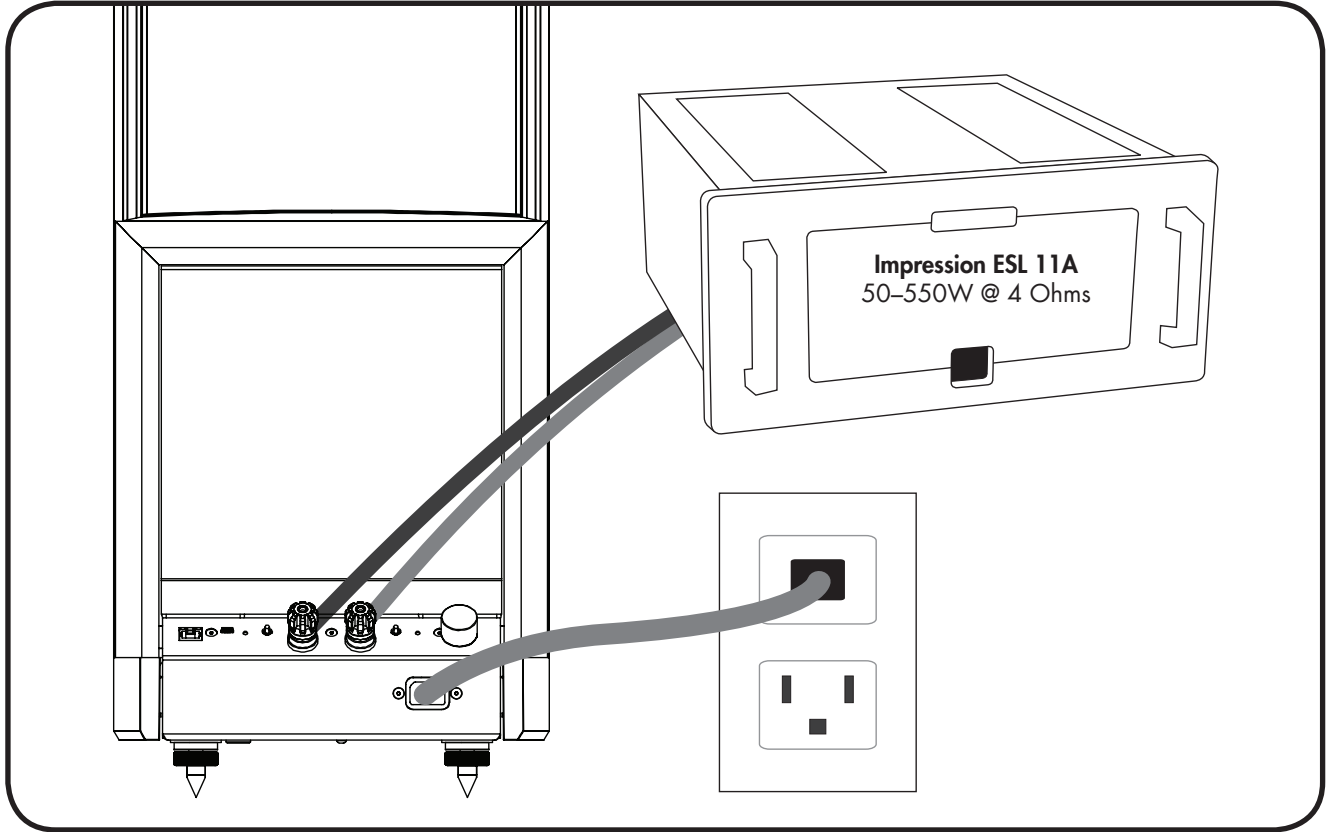
ステップ5: 音楽をお楽しみください!

Impression ESL 11A

29Hz-23kHz \pm 3dB
90 lbs. (40.9 kg)
4 Ohms
91dB @ 2.83 V/M







操作および接続

AC 電源接続部

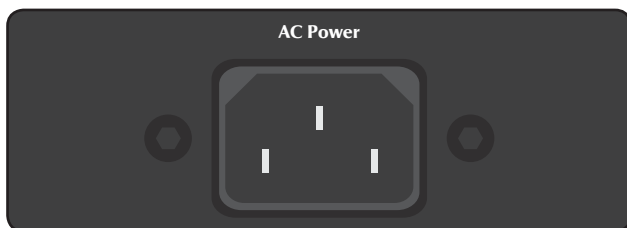
このマーティン・ローガンのスピーカーは、内蔵の電源供給装置を使用して静電セルと増幅されたウーファーシステムを作動させるため、AC電源に接続する必要があります。そのため、IEC規格の電源ケーブルがそれぞれのスピーカーに付属しています。電源ケーブルを接続する際は、最初にスピーカーの背面パネルにあるAC電源コネクタにしっかりと差し込み、次いで壁面のAC電源コンセントに差し込んでください。このスピーカーには、信号を検出する電源供給装置が組み込まれており、音声信号のない状態が数分間続くとスイッチが切れ、音声信号が流れると2秒以内にパネルを再帯電させます。

専門店で取り扱いのある高品質な電源ケーブルがお勧めです。一般的なケーブルよりも品質が高いとメーカーが謳う電源ケーブルは数多く出回っています。ただし、使用するシステムコンポーネントの品質がそれほど高くない場合、ケーブルの効果が分かりにくいこともあります。

このスピーカーは、最初に販売される国内の電力サービスに対応するよう設定されています。ご購入いただいた装置に適合するAC電源の電力定格は、梱包箱およびスピーカーに貼付されたシリアル番号プレートに印字されています。最初の販売国からこのスピーカーを持ち出す際には、持ち出し先の国で供給されるAC電源がスピーカーに対して適切かどうかを確認してから接続および使用を始めてください。適合しないAC電源に接続した場合、スピーカーの性能が著しく低下したり、重大な損傷が発生したりする恐れがあります。



警告：電源ケーブルがAC電源に接続された状態で、スピーカー側の電源ケーブルを脱着しないでください。また、電源ケーブルがAC電源に接続された状態で、反対側のソケットをスピーカーの電源コネクタに接続しないまま放置するのもお止めください。



AC電源接続部

信号入力部への接続

可能な限り品質の高いスピーカーケーブルをお使いください。システム内で使用するスピーカーケーブルの種類および長さは、音楽再生の質に影響を及ぼします。ケーブルを選択する際には、#16よりも太いケーブルを選ぶようにしてください。一般的に、使用するケーブルの長さが長いほど低いゲージの必要性が高くなり、ゲージの数字が小さくなるほど音はよくなります（およそ#8～12程度の太さまで、この考え方を適用できます）。

標準的なヘビーゲージのケーブルよりも品質が高いとメーカーが謳うスピーカーケーブルは数多く出回っています。こうした高品質ケーブルの有効性については弊社でも確認しており、時にはゲージを変える以上の効果をもたらすこともあります。ただし、使用する機器の品質がそれほど高くない場合、ケーブルの効果が分かりにくいこともあります。

接続はスピーカー背面にある電子パネルの信号入力部で行います。この際、スペードプラグ（Yラグ）を使うと、理想的なコンタクトで簡単に接続可能です。締めるときには工具を使わず、手でスピーカー端子のネジを回すようにしてください。また、締めすぎには注意してください。

信号入力端子にスピーカーケーブルを接続する際には、配線の色をそろえるようにします。スピーカーの左右チャンネルの(+)端子に同じ色のケーブルがくるよう十分に確認してください。低音が薄く音像がぼやけてはつきりしない場合は、(+)と(-)の配線の色が左右チャンネルで一致しているかを確認し、違っていれば配線をやり直してシステムを正しい極性にしてください。



警告：音声信号端子へのケーブル脱着前には、アンプの電源を切ってください。

エージング

スピーカーを初めて鳴らす場合、低音が多少薄く感じられることがあるかもしれません。これには、ウーファーに使用されている高品質で長寿命の部品が関連しています。マーティン・ローガンのカスタムウーファーで厳密な音楽鑑賞をする前には、90dBの音量（適度な再生音量）で72時間程度、慣らし運転をするようにしてください。また、クロスオーバー関連の部品（および、それよりやや必要性は低いものの、固定子）についても、ほぼ同じ条件のエージングが必要となります。

リアパネルコントロール部および接続

ARCセットアップ・スピーカーリンク

ARCの実行中、2台のスピーカーへの接続には、このRJ-45（イーサネットタイプ）コネクタが使用されます。詳しくは、この説明書の「アンセム・ルーム・コレクション (ARC™) のセットアップ」の章を参照してください。

ARCセットアップ入力

ARCのセットアップ時には、このミニUSBコネクタでスピーカーをコンピューターに接続します。詳しくは、この説明書の「アンセム・ルーム・コレクション (ARC™) のセットアップ」の章を参照してください。

ARCの状態

ARCステータスランプは、以下の状態を表します。

- ・ **無色**：ARCオフ
- ・ **緑色点灯**：ARCオン。補正フィルターあり。
- ・ **赤色点滅**：ARCオン。補正フィルターなし。
- ・ **赤色点灯**：USBコネクタを通じてコンピューターと接続中、またはスピーカーがARCセットアップ・スピーカーリンクを通じて接続中。

ARCルームEQ

補正曲線がスピーカーにロードされた後、このスイッチでARC補正のオンとオフを切り替えます。

信号入力部

詳しくは、この説明書の前のページの「信号入力部への接続」の項を参照してください。

中低域コントロール

Mid-Bassコントロールノブは、中低域レベルを-2dB、0dB、または+2dBで調整します。この設定は、部屋の広さと構造、システム構成、そして（最も重要なこととして）個人的な好みによって異なります。コントロールノブを上げると（+2dB）、一般的にはより豊かなサウンドになります。逆に下げると（-2dB）、明るくエア感が増した音になります。ご自身の耳で確認しながら、お好みに応じて最終的な設定を決めてください。

中低域レベルの設定の最終判断を下す前に、部屋の相互作用を排除するためにARCを実行することを検討してください。ARCの実行中は、Mid-BassコントロールはARC測定に影響しません。

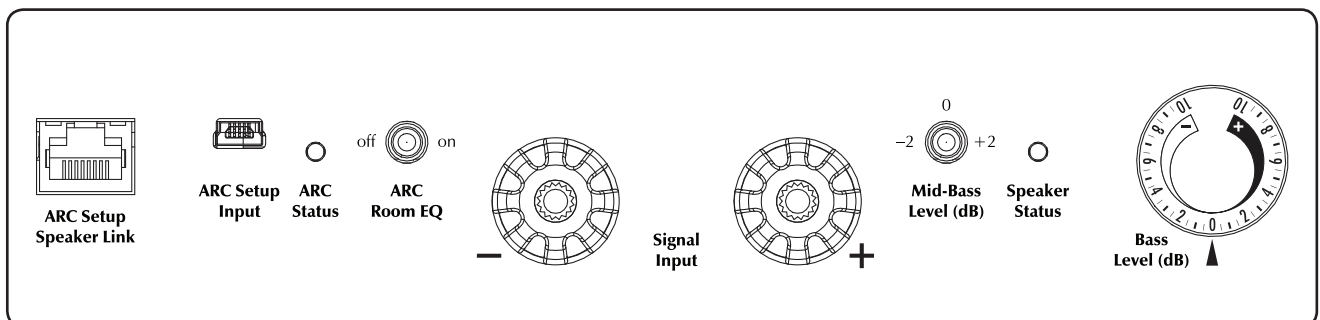
スピーカーの状態

スピーカーステータスランプは、以下の状態を表します。

- ・ **緑色点灯**：スピーカー作動中。
- ・ **赤色点灯**：スピーカースタンバイモード。
- ・ **赤色点滅**：エラーモード。エラーが解消されると、スピーカーは通常動作を再開します。30分経っても赤色点滅のエラーモードが解消されない場合は、スピーカーの電源ケーブルを抜いて、再び差し込んでください。それでも赤色点滅のエラーモードが持続する場合は、スピーカーの点検・修理が必要です。
- ・ **赤/緑色点滅**：熱保護モード。アンプが熱保護モードに入っています。温度が安全レベルにまで下がると、通常動作を再開します。30分経っても赤/緑色点滅の熱保護モードが解消されない場合は、スピーカーの電源ケーブルを抜いて、再び差し込んでください。それでも赤/緑色点滅の熱保護モードが持続する場合は、スピーカーの点検・修理が必要です。

低域コントロール

Bassコントロールノブは、75Hz以下のレベルを±10dBで調整します。これは、異なる振幅のピークとディップが実際の環境でよく現れる領域です。この設定は、部屋の広さと構造、システム構成、そして個人的な好みによって異なります。低域レベルの調整をする前に、部屋の相互作用を排除するためにARCを実行することを検討してください。ARC測定の実行中は、Bassコントロールノブの設定はARC測定に影響しません。



背面の接続部およびコントロールパネル

配置

リスニング位置

まず前面の壁(リスニング位置から見て正面の壁)からスピーカーの背面を30センチほど離し、側面の壁から静電パネルの端を60センチほど離します。リスニング位置からスピーカーまでの距離は、スピーカー間の距離よりも長くなるようにします。この際、中央の音像の定位感と音場の広がりご注意ください。

スピーカーとリスニング位置の間に決まった距離はありませんが、部屋との関係性は考慮に入れる必要があります。縦長の部屋の場合、自ずとその関係性にも変化が生じてきます。スピーカー間の距離は、リスニング位置からスピーカーまでの距離よりもはるかに短くなるでしょう。一方、横長の部屋だと、リスニング位置からスピーカーまでの距離がスピーカー間の距離よりも短くなるかもしれません。その場合、中央の音像がぼやける可能性があります。

いったんスピーカーシステムの配置が決まったら、ある程度の時間、その配置で音楽を聴いてみてください。スピーカーシステム自体の音質も微妙に変わっていくので、数日の間は大きな変更を加えずに、そのまま様子を見ることをお勧めします。初期状態から72時間ほど音楽を再生する中で、少しずつ低音の深みが増し、高域も広がりを見せるようになってくるはずですが、微調整が必要な場合、その後に行うことで、より正確な音の違いを聞き比べることができるようになります。

リスナーの背面の壁

近接場反射は、背面の壁(リスニング位置の後ろの壁)からも発生する可能性があります。リスニング位置が背面の壁近くにある場合、この反射が問題を引き起こし、音像定位が乱れる原因となり得ます。背面の壁材としてより望ましいのは、反射率の高い素材よりも吸音性のある素材です。もし背面の壁が硬質の素材で、リスニング位置がその壁に近い場合は、音を吸収するような仕掛けや工夫(装飾用の壁掛けや吸音材の使用など)を試してみてください。

スピーカーの背面の壁

正面の壁(スピーカー背面の壁)については、極端に柔らかい素材または硬い素材は避けた方が無難です。例えばガラス窓のような素材は、音が反射してハイ上がり気味になり音像が乱れる原因となります。このような場合は、カーテンや窓枠用の飾り布、または本棚のような家具を壁に沿って配置し、壁

表面からの過度の反射を拡散させるといいでしょう。一般的に、部屋の他の面(側面や背面)が硬く平滑すぎない素材であれば、正面の壁は石膏ボードや型押し加工された壁面素材でも十分です。一方、正面の壁全体が柔らかい素材の場合があります。例えばカーテンで覆われている場合などですが、そのような室内では音の輪郭がぼやける傾向があります。全体的に沈んだ雰囲気となり、音のメリハリも弱く感じるでしょう。このような場合は、逆に硬い表面を追加することで部屋の状態を改善させることが可能です。

理想的な正面の壁は、ドアや開口部のないひと続きの長い壁です。開口部などがある場合、それによって各チャンネルからの反射や低音の特性が違ってくることがあります。

側面の壁

一般的な経験則では、スピーカーをできるだけ側面の壁から遠ざける方がよいとされています。しかし、マーティン・ローガン独自の制御された分散静電トランスデューサーは、その固有の性能として、側面の壁からの反射を最小限に抑えることができるため、設置位置を側面の壁から60センチ程度離すだけで十分な場合がほとんどです。それでも、側面の壁が非常に近いことで、システムの音がハイ上がりになりすぎたり、音像の定位が好みに合わなかったりする場合は、それぞれのスピーカーの端に直接、カーテンや柔らかい素材を置いてみてください。側面の壁の理想形は、まったく側面に壁がない状態です。

試行錯誤

トウイン(内振り) —ここからは配置に関する実験です。まずは、スピーカーをリスニングエリアに向かって内に振り、次に部屋に対して平行に戻します。音色のバランスと音像の変化に気づかれましたか?内に振ったときは、平行に戻した場合と比べて、システムの音がわずかにブライトな方向になったのではないのでしょうか。つまり、トウインを微調整することで、部屋の(柔らかいまたは硬い)環境条件を柔軟に補正することができるようになるというわけです。

通常振り角は、湾曲したトランスデューサー部の内側の3分の1を聴くことができる角度が理想的と考えられています。トウインの適切な角度を見つけるシンプルかつ効果的な方法は、リスニング位置に座り、あごの下に懐中電灯を添えて各スピーカーに向けることです。懐中電灯の光がパネルの内側の3分の1以内を照らしていれば、トウインの角度は適切ということになります。

スピーカーを前後に傾ける—この説明書の「分散の相互作用」の章に示された図にあるように、垂直方向の分散は固定子パネルの上下にわたって指向性があります。例えば、床付近に座っているような場合、スピーカーを少し前方に傾けると明瞭さと正確さが向上します。

音像—スピーカーのセッティングが適切に決まると、スピーカー間の幅よりも音場が広がる場合があります。優れた録音の音源では、楽器の音が(左右)スピーカーの両端を超えて広がる一方で、ヴォーカルの声はきっちり真ん中に定位するはずで、楽器のサイズは、大きすぎることも小さすぎることもなく、録音者の意図どおりに再現されます。

さらに、音場の適切な奥行きに関しても注意してみましょう。左右スピーカーの垂直方向の配置(傾き)、正面の壁からの距離、振り角などがまったく同じであることを確認してください。これにより音像表現のクオリティが大幅に向上するはずで、

低音のレスポンス—低音のレスポンスは、単調(音階が感じられない)であっても重すぎてもいけません。内臓の奥にまで染み渡るような低音でありつつ、タイトさと明確さを併せ持つような音であるべきです。キックドラムの音はタイトでパーカッシブに、ベース弦はフレーズ全体で強弱バランスが破綻しない均一で一貫性のある音が理想です。

音のバランス—ヴォーカルの声は朗々として自然に、シンバルはディテール細やかで明瞭でありながら派手さや甲高さが抑えられた音で、そしてピアノは優れたトランジェント特性と深い響きの音域が再現されるべきでしょう。こうした特徴をうまく再現できない場合は、「ルームアコースティック調整」の章を読んでください。この章を読むことで、これらの理想的な音質に近づく手がかりが得られるはずで、

最終的な設置位置

十分にエージングをし、壁の処理や振り角の設定が終わったら、スピーカー背面から壁までの距離の実験を始めましょう。スピーカーをわずかに前方に移動させてください。低音のレスポンスはどうなりましたか?音像はどう変化したでしょうか?音像がよりオープンに、より空間的になり、低音のレスポンスがよりタイトになるほど、スピーカーはベストな位置に近づいています。では今度は、スピーカーを元の位置から15センチほど後方に移動して、改めて音像と低音のレスポンスを聴いてみてください。このようにして動かしていくと、いずれかの位置でピンポイントの音像と良好な低音のレスポンスが得られるはずで、その位置が、正面の壁からの最適な設置位置となります。

次は、スピーカー間の距離を調整しましょう。左右のスピーカーを離して音を聴いてみてください。低音のレスポンスが弱くなる反面、音場が広がり定位もよくなったのではないのでしょうか?**理想的なリスニング位置とスピーカーの位置は、以下のような基準で決めることができます。**

- 低音レスポンスのタイトさと広がり
- 音場の幅
- ピンポイントな音像の定位

これら3つの基準の中から最優先のものを決定し、ご自身にとって最良のスピーカー位置を決定してください。

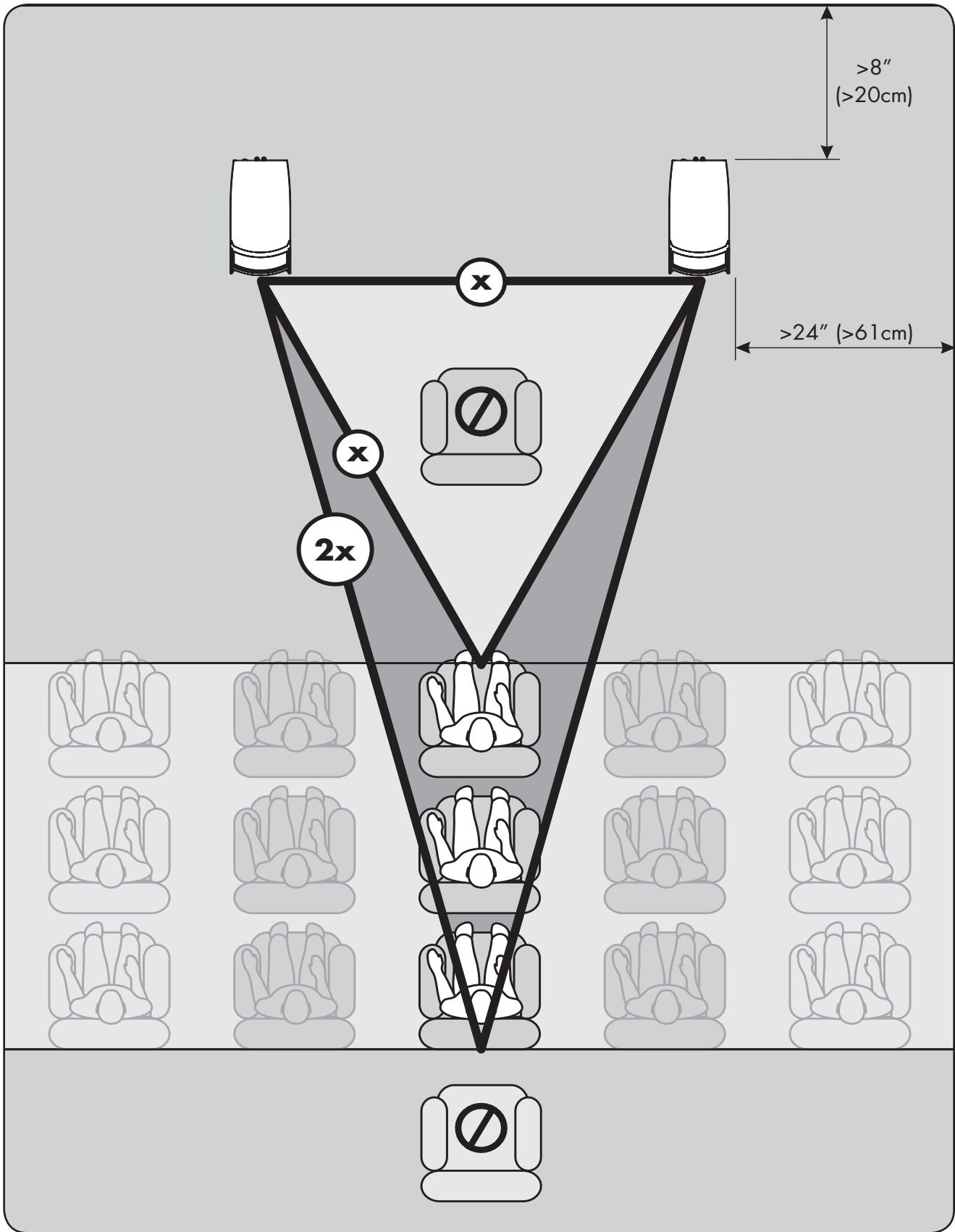
補足的な微調整

この補足的な微調整は、スピーカーが専用のリスニングルームに置かれている場合に有効です。スピーカーの配置に関して、以下の手順と測定方法を適用し、システムのパフォーマンスにどのような変化が起こるか試してみてください。この方法を使うことで、スピーカーの位置を最適化し、定在波を最小限に抑えることができるようになります。

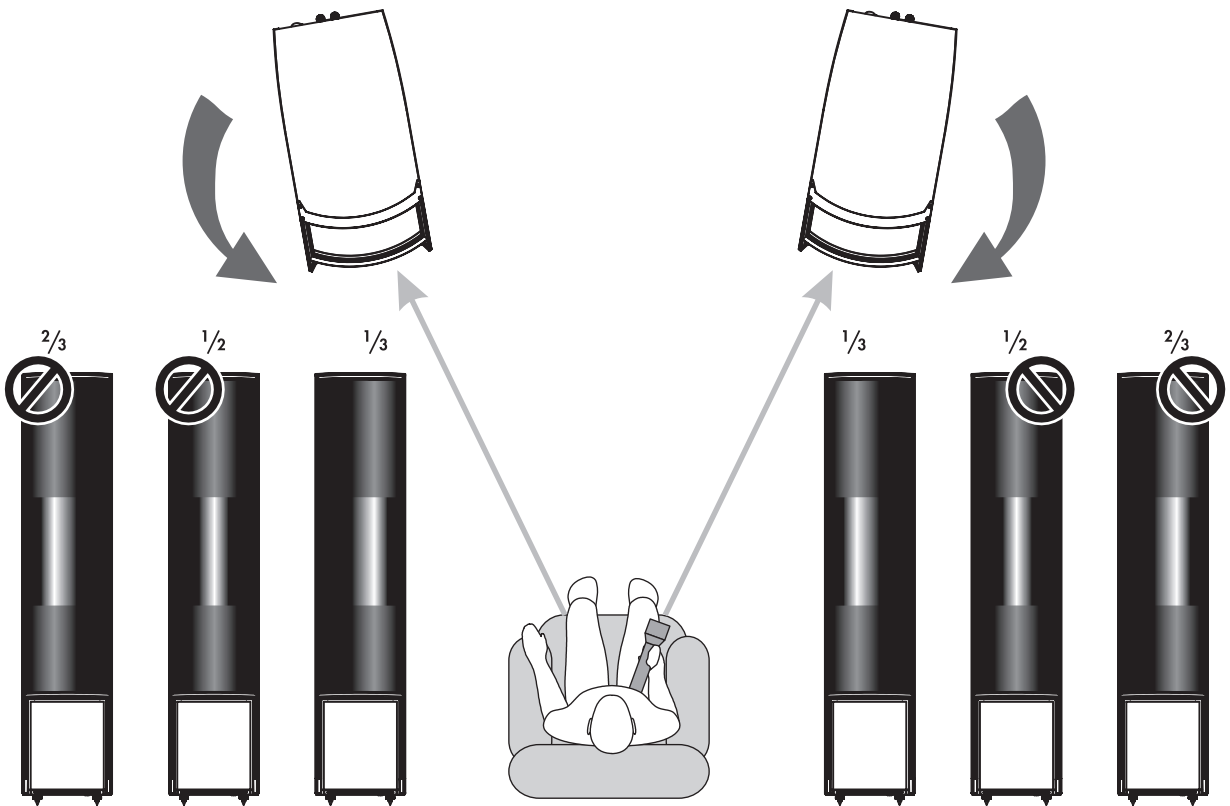
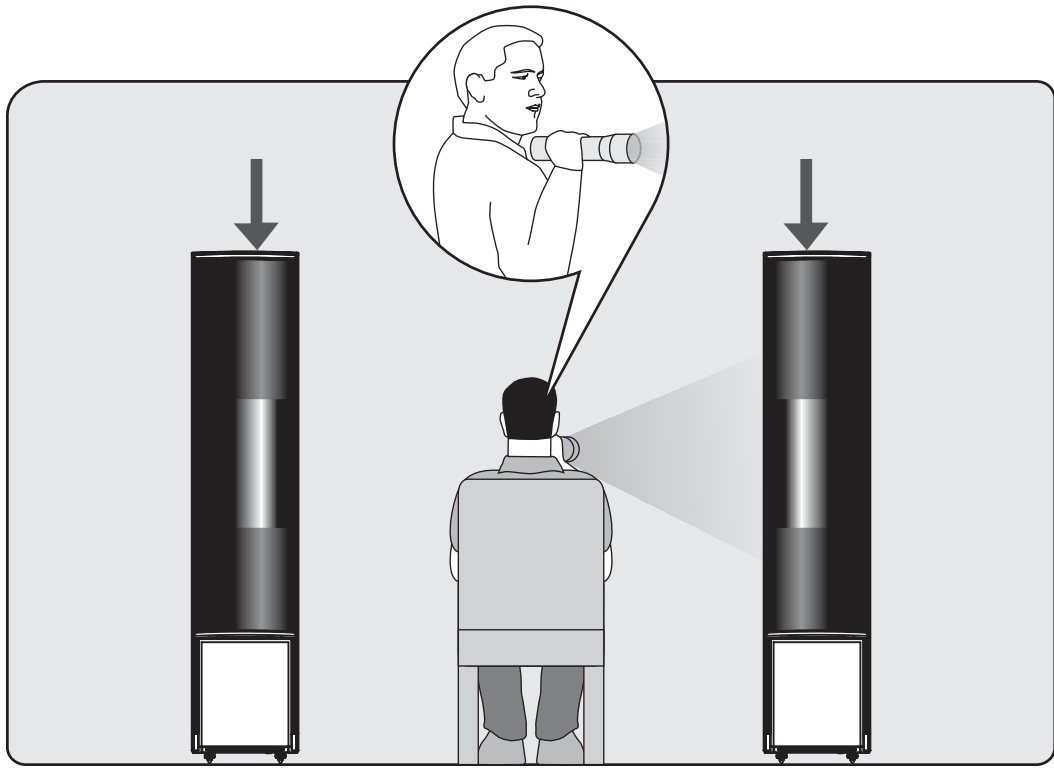
- 1 正面の壁(リスニング位置の前方)から湾曲トランスデューサーの中心までの距離:正面の壁からの距離を求めるには、天井の高さ(センチ)を測定し、その数値に0.618を掛けます(つまり、天井の高さ(センチ)×0.618=正面の壁から湾曲トランスデューサーの中心までの距離)。
- 2 側面の壁から湾曲トランスデューサーの中心までの距離:側面の壁からの距離を求めるには、部屋の幅をセンチ単位で測定し、18で割ります。次に、割り出された数値に5を掛けます(つまり、部屋の幅(センチ)÷18×5=側面の壁から湾曲トランスデューサーの中心までの距離)。

音楽鑑賞をお楽しみください

ご購入いただいたスピーカーは非常に精度が高く、セットアップを念入りに行えば行うほど、その恩恵を受けることができます。ここまでに説明したヒントに注意していただきながら、わずかな変更が違いを生み出すことを実感してください。また、これからこのスピーカーと共に過ごされる中で、スピーカーの配置を積極的に実験して、部屋とスピーカーとの最適な関係を見つけていただくことをお勧めします。その努力は必ず報われるはずで、



Final placement.



Flashlight toe-in technique.

アンセム・ルーム・コレクション (ARC™) のセットアップ

注: ARCルーム・コレクションを実行するための詳細な手順は、ARCの説明書に記載されています。ARCキットは別売りです。

このスピーカーには、室内でスピーカーの低域出力を最適化するためのアンセム・ルーム・コレクションに対応したアクティブウーファーシステムが採用されています。ARCシステムでは、USBケーブルでコンピューター*をマイクとスピーカーに接続します。そして、複数のデータポイントからの情報を処理し、最適なソリューションを構成して、精度の高い部屋のレスポンスを実現します。

ARCは、複数の測定ポイント（最低5個から最大10個までのデータ位置）を利用するため、部屋に固有の特性を学習することができます。ARCソフトウェアは、コンピューターのプロセッサを使用して各測定ポイントの補正曲線を計算し、一般的なルームイコライザーシステムで見られる、それほど洗練されていない「計算機」の丸め誤差を実質的に最小限に抑えます。さらに、ARCソフトウェアはキットに含まれているマイクに合わせてソフトウェア自体を校正することができるため、校正されていない場合に生じる可能性のあったデータを歪ませる干渉をも排除することが可能です。

とはいえ、ARCは部屋の相互作用によって引き起こされる音響異常を最小限に抑えるためにウーファーの出力を調整するように設計されていますが、それでもデジタル方式のルーム・コレクションを実行する前には、従来の方法を使用して室内ができるだけフラットなレスポンスを得られる状態にしてください。ちなみに、スピーカーの配置は低域の相互作用対策を講じる際の最も重要なパラメーターの1つです。また、リスニング位置も同じく重要ですが、多くの場合、移動するのが難しい他の要因の影響の方が大きくなる傾向があります。

ARC：スピーカーとコンピューターの接続

ARCの説明については、<https://pdn.co.jp>をご覧ください。

- ARCを実行する前に、スピーカーの配置、トウイン、および必要に応じて前後の傾き（垂直方向の角度）を調整してスピーカーをセットアップします。
- 測定中、ARCはBassコントロールとMid-Bassコントロールの設定をオーバーライドします。つまり、これらのコントロールはARC測定には影響しません。ARC補正曲線がスピーカーにアップロードされた後で、これらのコントロール機能が再び有効になり、微調整が可能な状態に戻ります。
- スピーカーの背面パネルには、「ARC Setup Speaker Link」と印字されたRJ-45（イーサネットタイプ）ポートがあります。イーサネットケーブルでRJ-45にテザー接続して、ステレオスピーカーペアをつないでください。これにより、ARCソフトウェアを1回実行するだけで、ステレオペアのスピーカーに対してARC測定を実行できます。ただし、スピーカーをつなぎ合わせることは必須ではなく、最終的な測定結果に違いはありません。各スピーカーに個別にARCを実行させることも可能で、その場合、ソフトウェアを2回実行することになります。
- スピーカーの背面パネルには、「ARC Setup Input」と印字されたミニUSBポートがあります。スピーカーとコンピューター*は、このポートを介してUSB-Aケーブルで接続します。接続はスピーカー1台ずつです。
- ARCのマイクは、ミニUSBポートからUSB-Aケーブルでコンピューター*に接続します。

ARC ステータス LED

ARCステータスランプは、以下の状態を表します。

- 無色：ARCオフ
- 緑色点灯：ARCオン。補正フィルターあり。
- 赤色点滅：ARCオン。補正フィルターなし。
- 赤色点灯：USBコネクタを通じてコンピューターと接続中、またはスピーカーがARCセットアップ・スピーカーリンクを通じて接続中。

*注：ARCを実行する際のコンピューターとの互換性については、ARCの説明書および関連の情報を参照してください。

ルームアコースティック調整

部屋について

この分野について理解するには、多少の背景知識がなければなりません。また、実際にベストなパフォーマンスを得るには、ある程度の時間と試行錯誤が必要となります。部屋は、実際のところコンポーネントの1つであり、システムの重要な一部です。このコンポーネントには様々なバリエーションがあり、音楽体験の素晴らしさを劇的に強めたり、または逆に弱めたりすることがあります。

すべての音は波で構成されています。各音にはそれぞれに固有の波の大きさがあり、低音の音は事実上約3メートルから約12メートルもの波長になります。部屋はこの音の波を入れる3次元のプールのようなものです。その中で波は、部屋の大きさや表面の種類に応じて、反射したり強まったりしているのです。

覚えておいていただきたいのは、音楽的イベントの時間、空間、そして音のバランスを再現するための情報を文字どおり生成できるのは音楽再生システムに他なりません。理想的には、部屋はこの情報に関与すべきではないでしょう。しかし、どんな部屋でもある程度は音に影響を及ぼしているのです。幸い、マーティン・ローガンのスピーカーは、部屋による悪影響を最小限に抑えるよう設計されています。

先に進む前に、まずはいくつかの重要な用語について見ていきましょう。

用語

定在波

部屋の平行な壁は、特定の音を他の音声スペクトルよりも大きく聞こえるように増強し、「(音階が感じられない)単調な低音」、「ブーミーな低音」、または「膨らんだ低音」といった形の問題を引き起こします。例えば、100Hzの波長は約3メートルですが、仮に部屋の主要な一辺の長さが約3メートルであれば、その部屋は100Hzの周波数の音が増強することになります。こうした潜在的な問題は、キャビネットや家具などの大きなものを部屋に置くことで、その影響を最小限に抑えることが可能です。一部のシリアスな「オーディオマニア」の中には、この現象を解消するために文字通り平行な壁のない特別な部屋を作る人もいます。

反射面(近接場反射)

部屋の硬い表面は、特にスピーカーシステムの近くにある場合、一部の波を何度も反射させるため、システムの明瞭さや音像表現をぼやけさせます。ここで主に影響を受けるのは中

域や高域の短い波長の音波で、ちょうどヴォーカルの声やシンバルのような高域の音がこれに該当します。

表面と物体の共振

部屋の中のすべての表面と物体は、システムによって生成された周波数にさらされます。そして、音楽につき従う形で、楽器と同じように振動して音波を「運び」、音楽に悪影響を及ぼします。これはつまり、音楽と一緒に「歌っている」状態であり、リングングや低音のふくらみが発生したり、音が必要以上にハイ上がりになったりすることがあります。

共振空洞

部屋にある小室(床の間)やクローゼットタイプの空間は固有の「定在波」を引き起こし、特有の「(音階が感じられない)単調な」音を生成させる原因になり得ます。

部屋の中で手をたたいてみてください。反響音がすぐに返ってくるのでしょうか?その場合、近接場反射の問題が生じています。床の上で足を踏み鳴らしてみてください。低音が強調されて聞こえますか?その場合、定在波や大型パネルの共振(しっかりと支持されていないことが原因)の問題が考えられます。部屋の小室に頭を突っ込んで大きな声で話してみてください。低音が極端に膨らんで(ブーミング)聞こえますか?それは、共振空洞によって起こる問題です。

経験則

硬い表面 vs 柔らかい表面

リスニングルームの正面または背面のいずれかの壁が柔らかい素材の場合は、反対側に硬い壁または反射性の壁があると効果的です。天井と床も同様の考えに従ってください。一方、側面の壁については、音像定位の観点から同じような素材にするのがいいでしょう。

このルールが示唆するのは、多少の反射はあった方が望ましいということです。実際のところ、カーペットやカーテン、吸音材などで部屋の減衰をあまりにも大きくすると、音楽システムから流れる音に生気がなくなり、曇って聞こえてしまうことがあります。逆に、硬い壁面ばかりの部屋では、音が過度に反射して明るくなりすぎ、体育館を思わせるような響きになってしまいます。最適な環境への近道は、バランスを取るということです。

分散させる物体

本棚やキャビネット、凹凸のある壁面など、複雑な形状をした物体は、こうした音の障害を分解し、卓越周波数を分散させるのに役立ちます。

しっかりとした設置

このスピーカーシステムは部屋の中に周波数(振動)または波を発生させます。音が生じるのは、このためです。その振動数は毎秒20回から20,000回にもなります。そのため、スピーカーシステムが床や硬い面にしっかりと設置されていない場合、音を出しながら揺れてしまうことで音質が低下する可能性があります。例えば、スピーカーがゴム足だけでカーペットの上に設置されていたりするような場合、低音の解像度が悪くなり、ブーミーになることさえあるでしょう。スピーカーをしっかりと設置させるためにも、スパイクの使用をぜひ検討してください(スパイクの詳細および取り付け方法については、「剛性の高い足による設置」を参照してください)。

ダイポールスピーカーと部屋について

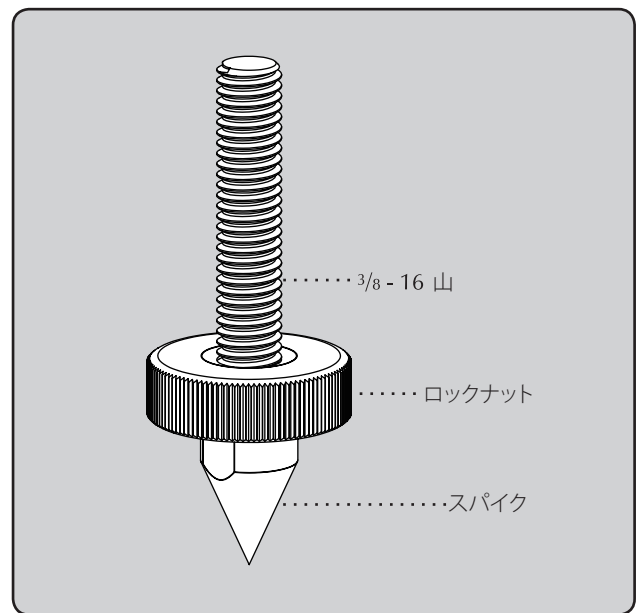
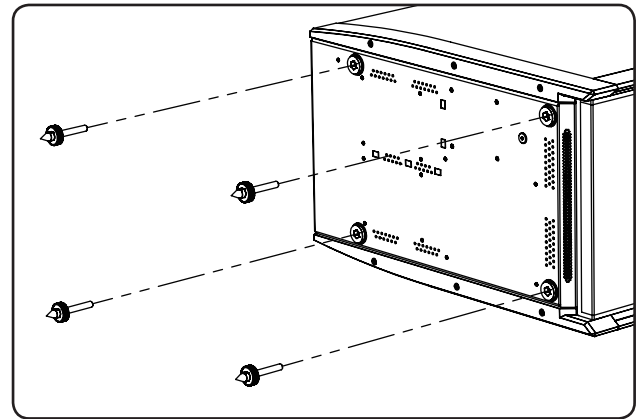
マーティン・ローガンの静電型スピーカーは、ダイポールスピーカーとして知られています。これはつまり、前面と背面のスピーカーの両方で音が生成されるということです。その結果、音楽情報はその背面の壁によっても反射され、前面のスピーカーで生成された情報と同調して(または別々に)届けられます。

低域は前面の壁の位置との関係で、強調される場合もゼロになる場合もあります。このスピーカーは、前面の壁(リスニング位置の正面の壁)から30センチほど離して配置したときに最良の結果が得られるよう設計されていますが、すべての部屋でそれが適用されるわけではありません。前面の壁との距離を変えながら低音のレスポンスの違いを聞くことで、低音の深みと音のバランスがベストな位置を見つけてください。

反射面と共振する物体が、中域と高域にどのような影響を及ぼすかについては、前項で見たとおりです。最初の波が耳に放射されるタイミングと、それに遅れて耳に届けられる反射情報によって、音像再現の手がかりとなる貴重なタイミング情報が混乱してしまい、結果として音像がぼやけ、ハイ上がりな傾向になってしまうのです。こうしたネガティブな状況が発生した場合には、柔らかい壁やカーテン、壁飾り、吸音材(詳しくは販売店にお問い合わせください)などを利用することが有効な対策となります。

剛性の高い足による設置

スピーカーの設置場所について試行錯誤が終わった後は、スピーカーに付属のETC(エネルギー伝達カップラー)スパイクを取り付けることをお勧めします。このスパイクを使用することで、スピーカーが床に対してよりしっかりと設置されるため、結果的に低音はタイトになり、音像はより整然としてディテールが豊かになります。ただし、スピーカーを動かすとスパイクが床を傷つける恐れがあるため、スピーカーの位置が決まるまではスパイクを取り付けないようにしてください。スピーカー底面の足のネジ山は、一般的な3/8-16です。



ETC™スパイク

スパイク取り付け手順:

- 1 底面の作業ができるよう、スピーカー本体を注意深く傾げるか側面を下にして横にします。作業は2人で行ってください。
- 2 既存の足を取り外します。スパイクを穴にねじ込み、最後まで回して締めます。スピーカーが水平にならないときは、いずれかのスパイクを緩めて高さの調整をしてください。
- 3 ロックナットを手で締めます。この際、ナットの締めすぎには注意してください。
- 4 スピーカー本体を直立させます。**注意:**スパイクで手やケーブルを傷つけないようにしてください。スパイクは先端が鋭く、床やカーペットを傷つける恐れがあるため、スピーカーを引きずったりしないでください。
- 5 スパイクを回して水平調整をします。スピーカーの水平調整が終わったら、ロックナットを改めて締めてください。**注意:**スピーカーを引きずると、スパイクの損傷につながる恐れがあります。

分散の相互作用

制御された水平分散

このスピーカーは、30度の水平分散パターンで音を放射します。この水平分散フィールドが、最適なリスニング位置をリスナーに提供しながら、側面の壁との相互作用を最小限に抑えます。スピーカーは、左右共にまったく同じ垂直角度で立っていることを確認してください。さもないと、音像が歪んだり解像度が乏しくなったりすることがあります。両スピーカーから放射される音波は、時間領域とスペクトル領域のいずれの面においても非常に正確です。従って、わずかな微調整でも顕著な音質的改善につながります。

制御された垂直分散

図で示したように、このスピーカーは制御された分散パターンを投影します。この垂直分散プロファイルは、床と天井との相互作用を最小限に抑えます。

マーティン・ローガン独自の制御された30度の円筒形波面は、部屋の相互作用を最小限に抑えつつ最適な音の分散を可能にします。これにより、広いリスニングエリアと確かな音像の再現を実現しています。

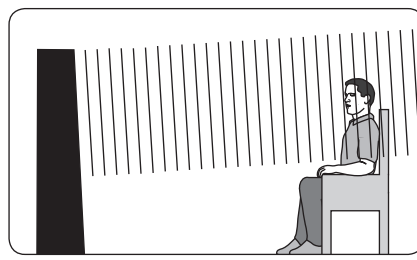
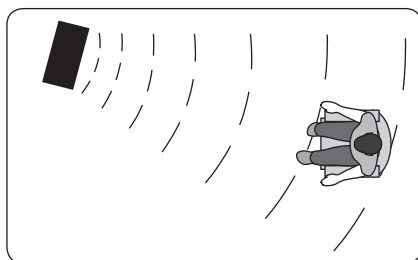
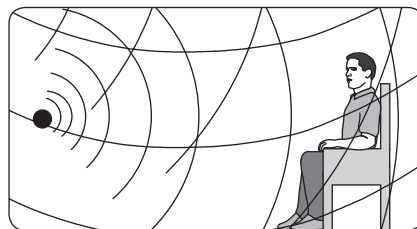
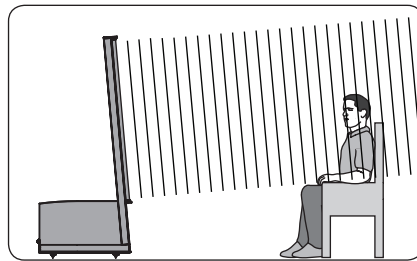
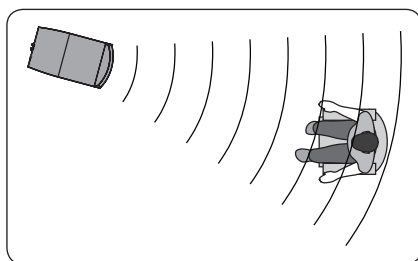
ここに見られるように、点音源のコンセプトは部屋との間に多くの相互作用を引き起こします。広い範囲に良好な周波数レスポンスを提供する一方で、音像は乱れぼやけてしまいます。

「ベネチアンブラインド」効果が生じているものの、角度の付いたマルチパネルスピーカーは良好な音像を再現しています。ただし、リスニングエリア内には、音が分断された範囲も含まれます。

主要な3種類の分散タイプ

音波が、それを生成するトランスデューサーよりも短くなるにつれて、その波の分散はより狭まり指向性が強くなるということはよく知られた事実です。このことは、トランスデューサーが平らな面である限り起こります。そして大型フラットパネルスピーカーでは、この現象によりベネチアンブラインド効果が現れます。多くのメーカーが、いわゆる点波源放射に近づけるために、小型ドライバー（すなわち、ツイーターおよびミッドレンジ）を選ぶ理由のひとつが、これです。

歴史的に、大型フラットパネルのトランスデューサーから円滑な分散を実現しようとしたほとんどの試みにはトレードオフが存在しました。そうした状況の中、様々な方法を徹底的にテストすることで、私たちはシンプルでありながら極めてハンドクラフト的なプロセスの着想に至ったのです。それは、放射面を湾曲させることによって、水平アーチによる効果を生み出すというものでした。これにより、マーティン・ローガンのエンジニアは、トランスデューサーの高域分散パターンを制御することができるようになったのです。



静電型の利点

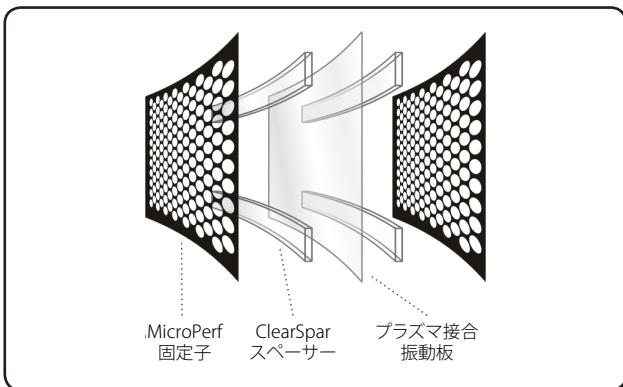
「シースルー」の素材で音が再現できるのでしょうか?静電エネルギーが、それを可能にします。

伝統的なスピーカー技術の世界では、磁気で動くコーンやドーム、振動板、リボンなどを扱いますが、静電型スピーカーの世界では、互いに引き寄せ合い反発し合う荷電した電子を扱います。

静電気概念を完全に理解しようとする場合、多少の予備知識はあった方がいいでしょう。理科や物理の授業で、電荷は互いに反発し、異種の電荷は互いに引き合うといった内容を勉強したことを覚えていますか?この原則が、静電気概念の基礎となります。

静電トランスデューサーは、固定子、振動板、スペーサーという3つの部品で構成されています。振動板は実際にそれ自身が動き、空気を揺らして音楽を生み出します。固定子の仕事は静止した状態を維持することで、そこから固定子という名前になっており、動いている振動板の基準点として機能します。スペーサーは、固定子間で振動板が動くべき距離を定める役割を担います。

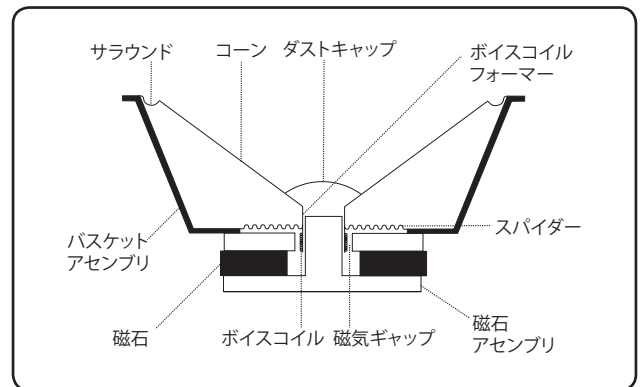
アンプから静電型スピーカーに音声信号が送られると、この信号は強度が同じで極性が反対の2つの高電圧信号に変換されます。この2つの高電圧信号はその後、固定子に印加されます。その結果、固定子上には極性が対立する高電圧によって静電場が生成され、それが振動板に対して同時に作用・反作用することで、振動板が前後に動いて音楽が生み出されます。この技術はプッシュプル動作として知られており、その優れた線形性と低い歪み特性が、静電コンセプトの音の純度に大きく貢献しています。



XStat静電トランスデューサーの断面図。使用部品数が最小限のため、シンプルであることが分かります。

静電型スピーカーの振動板はその全域にわたって一様に駆動するため、非常に軽くて柔軟性があります。これにより、瞬間的な信号の変化にも敏感に反応できるため、音声信号を完全にトレースできるようになり、繊細で陰影に富んだ明快な音楽再生が可能になります。一般的な電磁型スピーカーの問題を見ると、なぜ静電型スピーカーが有益なのかが容易に分かるでしょう。電磁型スピーカーで使用されているコーンやドームは、その設計上、均一に駆動できません。コーンの駆動部は頂点部のみ、ドームの駆動部は外周です。その結果、コーンやドームの残りの部分は「同乗」しているに過ぎないこととなります。こうしたドライバーの理想として、コーンやドームには完全な剛性と減衰特性、そしてゼロ質量が求められますが、残念ながら、今日の私たちの世界ではその条件を満たすことはできません。

すべての電磁型ドライバーは、コーンやドームを動かすため、コーンやドームを所定の位置に保持するボイスコイルを使用する必要があります。このボイスコイルとは、フォーマーやスパイダーアセンブリ、またはサラウンドにコイルが巻き付けられたものです。これらの部品を高質量のコーンやドームの部品と組み合わせると、全体として非常に複雑なユニットになり、自ずと多くの弱点や潜在的な故障の可能性を内包してしまいます。こうした潜在的な欠点は、そのままこれらのドライバーに特徴的な歪みの多い副産物の一因となり、スピーカーに必要な素早く精度の高い運動の変換にとって(1秒間に40,000回!)、大きなデメリットになります。



典型的な可動コイルドライバーの断面図。部品数が多いため、複雑であることが分かります。

フルレンジ駆動

マーティン・ローガン独自のトランスデューサー技術に関するもう1つの重要な利点は、現在市販されている他のスピーカー製品に目を向けることで明らかになります。マーティン・ローガンの静電型スピーカーでは、臨界周波数帯でクロスオーバーネットワークを使用しておりません(その必要性がないため)。1枚のシームレスな静電膜が、単一のクロスオーバーポイントよりも上の周波数帯をすべて再現します。どうすればこれが可能になるのでしょうか。

まず、私たちは、音楽が高域、中域、低域という別々の部分で構成されているわけではないことを理解する必要があります。実のところ、音楽はすべての周波数が同時に相互作用する単一の波形で構成されているのです。

このスピーカーの静電トランスデューサーは、生来的に、元のイベントを記録するのに使用されたマイクと正反対の役目を果たします。単一の機能要素であるマイクは、音響エネルギーを電気信号に変換し、その電気信号は増幅されるか、ある種の記憶メディアで保存されるかします。一方、スピーカーの静電トランスデューサーは、アンプからの電気エネルギーを元の音響エネルギーへと変換します。

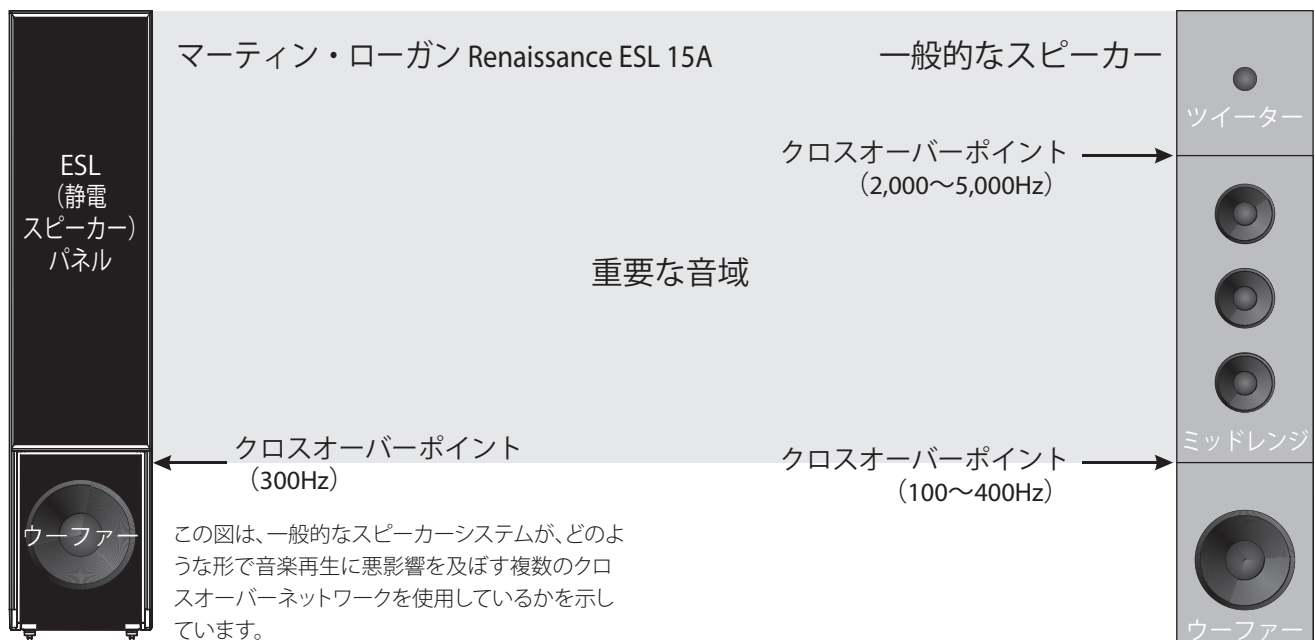
電磁型ドライバーは、その限界により、どんな単一ユニットも全周波数帯を再現することはできません。その代わりに、これら

のドライバーは固定された狭い帯域幅で動作するように設計されています。つまり、いくつかのユニットを電氣的に組み合わせることで、その合計が全体の信号と等しくなるようにしてやる必要があります。これは理論的には問題ありませんが、実際の世界では理論ほどうまくはいきません。

複数のドライバーを使うには、クロスオーバーネットワークを組み込んで、複雑な音声信号を、各ドライバーの設計に応じた個別の帯域(通常は高域、中域、低域)に分割する必要があります。しかし、これによって、全クロスオーバーネットワーク内および音響的な再結合プロセス中に位相関係のずれが発生し、厳密に音を聴いたときに、音声信号の非線形性と深刻な劣化が感じられるようになってしまいます。

一方、このスピーカーの静電トランスデューサーであれば、クロスオーバーポイントより上のすべての周波数を同時に単独で再生することができます。この単一のトランスデューサーを使うことにより、シンプルかつ明快な形で重要な音域を処理できるようになるのです。

一般的なツイーター、ミッドレンジ、およびウーファーシステムに関連するクロスオーバーの位相の収差が解消され、フルレンジパネルから放射される音波の正確な位相関係により、音像および音場の再現性が劇的に向上します。



マーティン・ローガンの独自技術

XStat トランスデューサー

XStatトランスデューサーは、CLS、MicroPerf、Generation 2振動板、ClearSpar™、真空接合などといった無数の技術とデザインの革新を取り入れています。

CLS (Curvilinear Line Source (曲線ラインソース))

オーディオの黎明期以降、スムーズな分散を実現することは、すべての設計者にとっての課題となってきました。大型パネルのトランスデューサーの場合、パネルが大きくなればなるほど分散パターンはより指向性が強くなるという特有の問題が立ちはだかります。

フルレンジの能力は広い表面積を介して達成されるため、静電トランスデューサーでワイドレンジを実現するのは、長い間、最も解決の難しい問題の1つでした。まるでトランスデューサーがスムーズな分散と仲違いでもしているかのよう、この問題を解決しようとしたほとんどすべての試みが、不十分な分散や音質の劣化という結果に終わったのです。

広範囲に及ぶ研究の結果、マーティン・ローガンのエンジニアは、音質を落とすことなくスムーズな分散パターンを実現するためのシンプルで明快なソリューションを発見しました。静電トランスデューサーの水平面を湾曲させることで、質量がゼロに近い静電振動板の純度を妥協することなく、制御された水平分散パターンを達成することができたのです。この技術の開発後、マーティン・ローガンはそれをラボから市場へと送り出すための生産体制を整えました。このマーティン・ローガン独自の技術は、弊社のすべての静電型スピーカーに適用されています。これは、実用的なユーザビリティと高品質な音という弊社に与えられた高い評価を支える技術の1つです。また、これがマーティン・ローガン製品に特徴的な「シースルー」の円筒シェイプを形作っています。

Generation 2 振動板

静電トランスデューサーの振動板には非常に精巧な導電性コーティングを採用しており、プラズマ接合プロセスを使用して原子レベルでポリマー表面に塗布されています。また、独自の化合物が、無酸素アルゴンチャンバー内のポリマー薄膜

の表面に適用されています。このプロセスにより、極めて均一な表面抵抗率の特性と光学的に透明な表面を持った、質量がほぼゼロに近い振動板が作られることとなります。この均一な表面抵抗率によって振動板表面上の帯電を制御し、その移動を調整します。従って、放電または「アーク放電」が起こることはありません。

MicroPerf 固定子

滑らかでコンパクト。すべてのXStatトランスデューサーで採用されているMicroPerf固定子技術では、パネル内で利用できる再生可能領域を見つけ出すことで、コンパクトな静電パネルであってもそのパフォーマンスを効率的に向上させます。なお、XStatトランスデューサーは、従来の静電パネルの約2倍のサイズに相当する帯域幅とダイナミクスをサポートしています。

真空接合

絶縁された2つの高純度カーボンスチール固定子、独自のプラズマ接合振動板、そしてClearSparスパーサーが溶接の強度を超える航空宇宙用接着剤で曲線形状に取り付けられることで、XStatトランスデューサーのパワー、精度、そして強度が達成されています。弊社独自の真空接合プロセスによって均一な振動板のテンションと極めて正確な構造公差が保証されるため、絶対的な精度、線形性、および効率性を得ることが可能となっています。

超剛性 AirFrame 技術

XStatパネルは、マーティン・ローガンのAirFrame技術を使用して、航空宇宙グレードの押し出しアルミニウム合金で作られたスピーカーキャビネットに取り付けられています。これにより、音楽が再生される表面積を遮ったり双極性放射パターンを妨げたりすることなく、パネルの強度を上げることができます。また、電気的および音響的な絶縁も提供しながら、振動や共振を引き起こす相互変調歪みも最小限に抑えます。

Powered Force Forward ベーステクノロジー

高度な増幅およびトランスデューサー設計の統合エンジニアリングを通じて、PoweredForceベーステクノロジーは、従来のシステムでは手の届かない低音のダイナミクスと精度をもたらします。PoweredForceテクノロジーに統合された低域イコライゼーション機能により、室内を最適に調和させるための正確なキャリブレーションも可能です。

スピーカー独自のForceForwardデザインが挑戦した課題は、室内でスムーズなベースレスポンスを実現するというものです。これは長い間、あらゆるスピーカーの配置に関連した最も「厄介な」問題の1つでした。従来のスピーカーシステムでは、正面の壁（スピーカーの背後の壁）から反射された低周波エネルギーは、前方に放射されたエネルギーと再結合するため、低音は「ブーミング」になるか、または「痩せて」しまいます。

マーティン・ローガンのエンジニアリングおよび設計チームは、正面からの有害な反射エネルギーを減らすため、水平方向に対向する2台の位相同期式独自ドライバーを連動させた革新的なシステムを構築し、この問題を解決しました。これによって、手軽にスピーカーを配置するだけで、クリーンでピュア、そしてパワフルなベースレスポンスを得ることができるようになったのです。

アンセム・ルーム・コレクション (ARC) テクノロジー

アンセム・ルーム・コレクション (ARC) では、専用に校正されたマイクを使って、それぞれに異なるリスニングスペース内のウーファー出力を測定します。この測定値を科学的に最適な応答曲線と比較し、ARCテクノロジーの高度なDSPアルゴリズムを適用することで、部屋の環境に合わせてスピーカーの出力を調整します。これによって、ドアや窓、そして硬い表面のようなパフォーマンスを妨げる部屋固有の障害が実質的に排除されます。

静電型スピーカーの歴史

1800年代後半は、どのようなスピーカーでも風変わりなものだと考えられていましたが、今日、私たちは音の再生の驚異を当然のように享受しています。

トーマス・エジソンが初めて蓄音機を発明したのは1880年以前のことでした。これはホーン付きの振動板で、再生用スタイラスから振動エネルギーが伝達されるものです。1898年、サー・オリバー・ロジは、彼が「ベロウイング・テレフォン（大声で鳴く電話）」と呼んだコーンのよるスピーカーを発明します。これは今日、私たちが知っている一般的なコーン型のスピーカードライバーと非常に似たものです。ところが1898年には電気信号を増幅するような方法がなかったため、ロジはこの装置を音楽の再生に使用するという意図は持っていませんでした。結果として、彼のスピーカーは当時の蓄音機に対して何も寄与しませんでした。しかし1906年になると、リー・ド・フォレスト博士が三極管を発明します。この三極管を使うことで、電気信号は増幅できるようになります。この発明を契機として、私たちが今日知るようなスピーカーがすぐにも登場すると思われるかもしれませんが、そうはなりません。驚くべきことに、その登場までにはそれから約20年待たなければならなかったのです。

1921年、電氣的に録音されたレコード盤が実現されます。この録音方法は、機械録音よりもはるかに優れており、ほぼ30dBのダイナミックレンジを持っていました。蓄音機では、この新しい盤のすべての情報を再生できなくなり、その結果、この新しい録音媒体に対処するためにスピーカーのさらなる開発が必要となったのです。

1923年になると、この新しい録音媒体の特性をフルに生かすことを目的として、電気蓄音機とスピーカーからなる音楽再生システム一式の開発が計画されます。そのプロジェクトを担当したのが、2人の若いエンジニア、C.W.ライスとE.W.ケロッグでした。

ライスとケロッグには、自由に使える設備の整った研究所がありました。この研究所には、他では見られない200ワットの真空管アンプや電気録音された新しいレコードの幅広いコレクション、それに過去10数年にわたって収集された様々なスピーカーのプロトタイプがそろっていました。例えば、ロジ

のコーン型スピーカー、圧縮空気を利用したスピーカー、コロナ放電（プラズマ）スピーカー、そして静電型スピーカーなどです。

しばらくすると、ライスとケロッグは、スピーカーの「候補」となる方式をコーン型と静電型に絞り込みました。後の世代がスピーカーを「一般的なもの」として見るようになるか、それとも生活とは無縁な「風変わりなもの」として見るようになるか、それが彼らの手腕によって決まります。

ライスとケロッグは、スピーカーの「候補」となる方式をコーン型と静電型に絞り込みました。

彼らの研究所にあった静電型スピーカーは特筆すべきもので、そのバイポーラススピーカーは、ドアのように巨大なものでした。振動板は豚の腸でできており（そのため腐りかけていた）、音声信号を伝えるために薄い金箔で覆われていました。

ライスとケロッグが、新しく電気録音されたレコードを静電型スピーカーで再生し始めたとき、彼らは驚きと感銘を受けました。再生音が素晴らしく、それほど本物らしく聞こえる楽器の音色は聞いたことがなかったからです。蓄音機のうるさくがなり立てるような再生音ではなく、正に本物の音楽のように聞こえました。彼らはすぐに、自分たちが大きな変化のただ中にいることを感じ取りました。蓄音機が徐々に時代遅れになろうとしていたのです。

2人は情熱を燃やし、静電型の設計の研究にかなりの時間を費やしました。しかし、彼らはじきに、現代の設計者でさえ直面している問題に遭遇することになります。それは、平面スピーカーで音声スペクトルの低い周波数帯を再生するためには、非常に大きな表面積が必要になるということです。2人に研究を命じたGE社の経営陣は大型スピーカーを許容しない考えであったため、静電型スピーカーに対する2人の研究が市販用製品として日の目を見ることはありませんでした。彼らは経営陣に対して、コーン型に取り組むことをしつこく報告しました。それ以降の30年間、静電型スピーカーの設計は暗礁に乗り上げたままとなります。

1930年代の大恐慌の間は、民生用オーディオはほとんど死んだ状態でした。ほとんどの人が古いビクトリアスタイルの蓄音機を使い続けており、電氣的に増幅される新しいタイプのスピーカーが受け入れられる余地はありませんでした。第二次世界大戦の終結前までは、民生用オーディオはほとんど

ど進歩しないままの状態が続きます。しかし、1940年代の後半に入ると、オーディオに再び命が吹き込まれ始めました。突如として、オーディオ製品に大きな関心が集まるようになり、それに伴ってオーディオコンポーネントの改良が強く求められるようになったのです。コーン型が確立されると、新たなオーディオ復興期に開発された製品にすぐに採用され始めました。

1947年、若い海軍技師であるアーサー・ジャンセン (Arthur Janszen) が海軍の研究プロジェクトに参加しました。その当時、海軍はマイクアレイ試験用の機器について、より優れたものを開発しようとしていました。試験用の装置には正確なスピーカーが求められましたが、当時のコーン型スピーカーは位相と振幅応答の非線形性が強かったため、試験装置の基準を満たすことができませんでした。ジャンセンは、静電型スピーカーはコーン型よりも本質的に線形であると考え、導電性コーティングで処理された薄いプラスチック製の振動板を使用してスピーカーの自作を始めます。この自作モデルは優れた位相と振幅の線形性を示し、ジャンセンの考えを裏付けたのです。

その結果に興奮したジャンセンは、自分の時間を費やして静電型スピーカーの研究を続けるようになりました。彼は間もなく、アーク放電による破壊的な影響を防ぐため、固定子を絶縁することを思いつきます。そして1952年には、静電型ツイーターエレメントの商業生産準備を整えました。この新しいツイーターは、アメリカのオーディオ愛好家の間ですぐにセンセーションを巻き起こします。彼のツイーターエレメントは高域の再生に限られていたため、ほとんどの場合、ウーファー（主にアコースティック・リサーチ製のもの）と組み合わせて使われましたが、このシステムはあらゆるオーディオ愛好家から高く評価されました。

しかし、このシステムはすぐに別の静電型スピーカーに先を越されます。

1955年、ピーター・ウォーカーはイギリスの雑誌、ワイヤレス・ワールドで静電型スピーカーの設計に関する3つの記事を発表しました。彼はこれらの記事で、静電型スピーカーの利点を実証しました。その内容は、静電型スピーカーでは、質量が小さく面積が大きい振動板を使うことができ、静電気の力によってその表面を均一に駆動できるというものです。これらの特性を持つ静電型スピーカーは生来的に広帯域および周波数応答がフラットであり、歪み成分が駆動側装置以上にすることはありません。

1956年、ウォーカーは民生用製品、今では有名なクォードESLを発表することで、自身の記事を裏付けました。このスピーカーは、その優れた精度ですぐにオーディオ業界におけるパ

フォーマンスの基準を打ち立てることになります。しかし、実際の使用面ではいくつか問題がありました。大音量では再生できず、低域のパフォーマンスは貧弱で、その負荷は一部のアンプでは許容するのが難しく、分散は非常に指向性が強く、電力処理は約70ワットに制限されていたのです。その結果、多くの人はコーン型のボックススピーカーを使い続けました。

1960年代初頭、アーサー・ジャンセンはKLH社と協力し、KLH 9を発表しました。そのサイズの大きさからクォードほどの音響的な制限はなく、ESLよりもはるかに大音量で、かつ豊かな低音で音楽を再生することができました。こうして競争が始まっていきます。

ジャンセンは静電型製品の開発を続け、Koss社のModel OneやAcoustech社およびDennesen社のスピーカー設計に尽力します。一方で、ジャンセン・ラボラトリー社の主任設計者だったロジャー・ウェストは、Sound Lab社の社長に就任しました。時を経て、ジャンセン・ラボラトリー社が売却されると、その製造用機械設備の半分をRTR社が購入することになります。この機械設備は、インフィニティ社の最初のスピーカー製品であるハイブリッド静電システム、Servostaticの静電パネルを作るために使用されました。他の会社もそれに続き、Acoustat社、Audiostatic社、Beveridge社、Dayton Wright社、Sound Lab社、Stax社などが、独自の技術でしのぎを削りました。

静電型スピーカーは、ピーター・ウォーカーが主張したとおりの性能を示したことで、進歩を続け力強く成長してきました。過去に問題となった制限などは、静電型製品のコンセプトに固有のものというわけではなく、そのコンセプトを応用する中で生じていたものです。

現在では、そういった制限も解決されています。アメリカの宇宙計画に端を発する材料の進歩が、設計者に静電原理の優位性を活用する能力を与えたのです。今日の静電型スピーカーは、高度な絶縁技術を活用しており、保護回路も備えています。そして、初期モデルに見られた貧弱な分散特性は、遅延線や音響レンズ、複数のパネルアレイを使用することによって、あるいはマーティン・ローガンの製品のように、振動板を湾曲させることによって対策が講じられています。また、最大許容入力と感度も向上しました。

こうした開発の歴史を経て、消費者はこれまでで最高の性能を誇るスピーカー製品を所有することができるようになりました。技術がここまで進歩したということ、ライストとケロッグが知ることはできないのは非常に残念です。

**こうした開発の歴史を経て、
消費者はこれまでで最高の性能を
誇るスピーカー製品を所有する
ことができるようになりました。**

よくある質問 (FAQ)

スピーカーの掃除方法は？

ダストフリーの布または柔らかいブラシを使ってスピーカーからホコリを取り除いてください。表面が木材の場合、布を少し湿らせてもかまいません。洗浄剤の種類にかかわらず、静電エレメントの上または近くでスプレーしないでください。木材部分にアンモニアが含まれた製品やシリコンオイルを使用しないでください。

ESLの利点は何ですか？

振動板は、エッジのみで駆動されるツイーターとは異なり、表面全体にわたって均一に駆動されます。低音を再生するために振動板を十分に大きくすることができ、それでいて高域再生のための軽さも実現できるような技術は静電型スピーカーの他にはありません。この独自の特性により、高域のクロスオーバーポイントとそれに関連する歪みを排除できるようになります。

どんなサイズのアンプを使うべきですか？

各スピーカーの仕様に合わせたアンプサイズをお勧めします。マーティン・ローガンのハイブリッド設計は真空管アンプでもトランジスターアンプでもその性能を十分に発揮できるため、各タイプの音の特徴をはっきりと表します。ただし、アンプは各インピーダンス負荷で安定して動作することが重要です。理想的なのは4Ω時で定格ワット数の2倍近くを出力、2Ω時ではさらにその2倍を出力するようなアンプです。

オーディオ/ビデオシステム内のスピーカーとテレビの間に、何らかの相互作用がある可能性はありますか？

実際のところ、テレビと静電型スピーカーとの間の相互作用は、テレビと一般的なその他のシステムとの間の相互作用よりも少ないでしょう。ただし、スピーカーにはダイナミックウーファーが搭載されているため、少なくとも30センチ程度はテレビから離しておくことをお勧めします。

スピーカーを常時接続したままにしておくと、電気代が跳ね上がりますか？

いいえ。使用していないときには帯電をオフにする回路があります。ただし、実際の電力消費量はそれほど変わりません。検出回路の主な目的は、静電エレメントへのホコリの付着を防ぐことです。

マーティン・ローガンのスピーカーに最適な電子機器やケーブルの推奨一覧などはありませんか？

電子機器、ケーブル、および電源ケーブルの選択に関する

質問は、恐らく最も一般的ですが、その答えは最も主観的なものでもあるとも言えます。あるセットアップでうまく機能したブランドが、別のセットアップではまったく駄目だったというような例は頻繁に見られます。一般的に、弊社のスピーカーは多くのメーカーとの組み合わせでいい結果を示しています。繰り返しになりますが、弊社では一部の製品を特に推奨しているわけではなく、どのような電子機器・ケーブルも使用可能と考えております。多くのメーカーの製品を試して、実際に聞いてみてください。大切なのはご自身の耳を信じることです。販売店は常に心強い情報源となりますので、周辺機器やケーブルなどを購入する際には相談してみるといいでしょう。

鉛筆などで振動板に穴があいてしまった場合、スピーカーの損傷はどの程度になりますか？

弊社の研究部門では、振動板に文字通り何百もの穴をあけて検証していますが、音質に影響が及ぶことも振動板が破れるようなこともありません。しかし、実際にその穴を目にすることになるため、精神衛生上のストレスになることはあるでしょう。そのような場合は、静電トランスデューサーの交換が唯一の解決策となります。

日光に当たった場合、スピーカーの寿命や性能に影響がありますか？

スピーカーを直射日光の当たる場所には置かないでください。太陽からの紫外線 (UV) は、グリルのクロスやスピーカーのコーンなどを劣化させる可能性があります。ただし、わずかな時間、紫外線に当たただけで問題になるようなことはありません。一般的に、スピーカーと直射日光の間にガラスがあるだけでも、紫外線がフィルタリングされることで静電膜自体への悪影響は大幅に軽減されます。

最近、マーティン・ローガンのスピーカーに問題が発生しました。アンプなどを接続していなくても、右スピーカーからヒスノイズのようなものが聞こえます。こうした事例が以前にもあったのですが、何らかの簡単な解決策があるようであれば教えてください。あるいはこれは、もう少し念入りに調べた方がいい問題ですか？

スピーカーにホコリがかぶっていると思われます。FAQの掃除機の質問を参照してください。エレメントの静電気は、空気中のホコリや花粉を引き付けます。1993年以降、弊社のすべてのスピーカーでは、音楽再生時のみエレメントに帯電を行う帯電回路基板を使って作られています。音楽を再生していないときには帯電しないため、ホコリを集めることもありません。

過度の煙やホコリは、静電型スピーカーに何らかの問題を引き起こしますか？

煙やホコリなどの汚染物質に過度にさらされると静電膜の性能に影響を与える恐れがあり、加えて振動膜の変色を引き起こす可能性があります。長期間使用しない場合は、スピーカーからプラグを抜いて、スピーカーを梱包していたビニール袋または布製のカバーで覆うようにしてください。年に3~4回、各スピーカーの帯電する部分を掃除機で掃除することをお勧めします。FAQの掃除機の質問を参照してください。

静電パネルに存在する高電圧で子どもやペット、自分自身が感電することはありますか？

いいえ。低電流の高電圧は危険ではありません。実際、弊社のスピーカーの電圧は、お使いのテレビ画面の表面に蓄積する静電気の電圧の10分の1以下です。

マーティン・ローガンのスピーカーは、熱帯気候の湿気の中で長期間耐えられますか？

マーティン・ローガンのお客様の中には、実際に熱帯地方にお住まいの方も数多くいらっしゃいます。そうした環境下でも、何年もの間、問題なく機能しています。継続的に帯電していた初期のスピーカーでは、この問題が懸念されることがありましたが、1993年以降、弊社のスピーカーはすべて、音楽の再生中にのみパネルが帯電するように設計されています。この改善は、安定性の面で弊社製品の性能に大きな違いをもたらしました。ただし、湿度の高い地域でエアコンがない環境の場合、通常より多めのメンテナンスが必要になる場合があるかもしれません。しかし、難しく考える必要はなく、気を付ける点はホコリから静電パネルを守ることです。多湿環境では、湿気がパネル上のホコリと結合して導電性をわずかに持つようになります。そしてこれが結果的に、スピーカーの膜から電荷が逃げる極小の経路となってしまいます。解決策は簡単です。時々、掃除機を強モードでかけてホコリを吸い取ってください。

マーティン・ローガンのスピーカーには、どうやって掃除機をかければいいですか？

掃除機をかける前に、スピーカーの電源を6時間~12時間（または一晩）抜きっぱなしにすると効果的です。真空圧が「繊細な」膜を傷つけるかもしれないと不安になるかもしれませんが、耐久性が高く作られているので心配はいりません。汚れやホコリは、掃除機で吸い取るか（ブラシアタッチメントは使用しないでください）、圧縮空気ですき飛ばすことができます。掃除機または圧縮空気を使う際には、パネルの前面に重点を置きつつ、両面の掃除を行うようにしてください。

雷雨の間は、スピーカーから電源ケーブルを抜くべきですか？

はい。または事前に抜いておくのがいいでしょう。天気荒れている間は、すべてのオーディオ/ビデオコンポーネントの電源ケーブルを抜くことをお勧めします。

トラブルシューティング

出力がない

- システム内のすべてのコンポーネントの電源が入っていることを確認してください。
- スピーカーケーブルおよび接続の状態を確認してください。
- すべてのインターコネクトケーブルを確認してください。
- 別のスピーカーセットを接続してみてください。出力がない場合は、システム内の他の機器（アンプ、プリアンプ、プロセッサなど）に問題がある可能性があります。
- 問題が一方のスピーカーのみで発生する場合は、スピーカーの位置を入れ替えて同じ問題が発生するか確認してください。スピーカーの位置にかかわらず同じスピーカーで問題が発生する場合、その問題の原因はスピーカー自体にあると考えられます。逆に、問題が元の位置から移動しない場合、システム内の他の機器（アンプ、プリアンプ、プロセッサなど）に問題がある可能性があります。

静電パネルからの出力がない、または弱い。高域が損失している

- 電源ケーブルを確認してください。スピーカーから壁面コンセントまで正しく接続されていますか？
- 電源ケーブルがコンセントに接続されていますか？
- 汚れやホコリを吸い取る必要があるかもしれません。FAQの掃除機の質問を参照してください。
- シングルワイヤー接続の場合は、ジャンパープレートが所定の位置にあり、スピーカー端子のネジがしっかりと手で締められていることを確認してください。
- スピーカー端子を確認してください。汚れていませんか？その場合は、消毒用アルコールで拭いてください。
- スピーカー端子を確認してください。緩んでいませんか？しっかりと手で締められていることを確認してください。
- パネルに異物（家庭用洗剤や石鹸など）が付着していませんか？そうであればスピーカーは修理が必要で、場合によっては静電パネルの交換もあり得ます。

ポップ音、カチカチ音、聞き慣れないノイズが聞こえる

- 時折発生するこれらのノイズは無害であり、オーディオシステムやスピーカーを傷つけることはありません。すべての静電型スピーカーは、時々変な音を立てることがあります。これは空中に浮遊している汚染物質（特にホコリ）が原因です。掃除機をかけることをお勧めします。

- 湿度が高いことにより、汚れやホコリの粒子がスピーカーに付着し、それが原因で発生しているかもしれません。
- 汚れやホコリを吸い取る必要があるかもしれません。FAQの掃除機の質問を参照してください。

誇張された高域、明るさ

- スピーカーのトウインを確認してください。詳しくは、この説明書の「配置」の章を参照してください。

低音が鈍い

- スピーカーの配置を確認してください。スピーカーを正面と側面の壁に近づけてみてください。
- 使用している足のタイプを確認してください。スパイクを取り付けてみてください。
- 静電パネルの出力が低い可能性があります。「静電パネルからの出力がない、または弱い。高域が損失している」を参照してください。

低音の不足、欠落

- スピーカーケーブルを確認してください。極性は正しいですか？
- スピーカー端子を確認してください。汚れていませんか？その場合は、消毒用アルコールで拭いてください。
- スピーカー端子を確認してください。緩んでいませんか？しっかりと手で締められていることを確認してください。

音像定位が不十分

- スピーカーの配置を確認してください。両方のスピーカーが壁から同じ距離にありますか？トウインの角度は同じですか？スピーカーを背面および側面の壁から離してみてください。
- スピーカーケーブルの極性を確認してください。正しく接続されていますか？
- 左のスピーカーと右のスピーカーを入れ替えてみてください。
- スピーカーはL字型の部屋に設置されていますか？その場合、音像が中心からずれる可能性があります。ルームアコースティック調整の選択肢について、販売店に相談してみてください。

ARCトラブルシューティング

コンピューターがARCマイクを認識しない

- マイクに接続されたUSBケーブルをコンピューターから外し、再び差し込みます。コンピューターに複数のUSBポートがある場合は、別のUSBポートを試してみてください。
- マイクをコンピューターに接続したら、コンピューターにマイクのドライバーがインストールされるまで1分ほど待ってください。
- ドライバーのインストールに失敗した場合は、スピーカーあるいはマイクとコンピューターの間に外付けUSBハブを経由させて接続してみてください。
- マイク用ドライバーの再インストールを試してみてください。Windows PC上で、「デバイスマネージャー」を開きます（「スタートメニュー」の「コンピューター」を右クリックし、「プロパティ」を選択）。デバイスの一覧で「サウンド、ビデオ、およびゲームコントローラー」を探し、利用可能なデバイスの一覧を展開します。問題のあるマイクを右クリックして「アンインストール」を選択します。マイクからのUSBケーブルをコンピューターに接続した状態で、デバイスマネージャーの任意の項目を右クリックし、「ハードウェアの変更をスキャン」を選択します。

ARCソフトウェアのインストール

- ARCソフトウェアをインストールする前に、スピーカーあるいはARCマイクがコンピューターに接続されていないことを確認してください。
- ソフトウェアのインストールに問題がある場合は、MartinLogan.comにアクセスしてインストールファイルをダウンロードし、最新バージョンかどうかを確認してください。
- それでもソフトウェアのインストールに問題がある場合、または最初の測定でソフトウェアが繰り返しフリーズするような場合には、別のコンピューターで試してみることをお勧めします。

IMPRESSION ESL 11A仕様*

システム周波数特性:

29-23,000 Hz \pm 3dB

推奨アンプ出力:

50-550W/ch, 4 Ω

指向性:

水平: 30°

垂直: 112cm ラインソース

感度:

91dB/2.83V/m

インピーダンス:

公称値: 4 Ω 、0.6 Ω @20kHz

クロスオーバー周波数:

300 Hz

高域/中域ドライバー部:

CLS XStat静電型、112 \times 28cm (3136cm²)

ウーファー部:

2 \times 20.3cm キャストバスケット、ハイエクスカージョン、拡張スロッドライブアセンブリを備えた剛性アルミニウムコーン、非共振非対称チャンバーフォーマット

アンプ出力:

ウーファー: 2 \times 275W/ch (4 Ω)、2 \times 550Wピーク

ルーム・コレクション(ウーファーシステム):

アンセム・ルーム・コレクション (ARC™) 対応

コンポーネント:

カスタム巻きオーディオトランス、空芯コイル、ポリプロピレンコンデンサー。24ビットDSPプリアンプ(ウーファー用のアンプと共に使用)

コントロール部:

Bass(バスコントロール): \pm 10dB (75Hz以下)

Mid-Bass(ミッドバスコントロール): -2dB、0dB、+2dB

ARCルームEQ: オン、オフ

音声信号入力:

WBT-0703Cu nextgen™ 5ウェイバイワイヤ対応スピーカー端子は、導電性を高め、完全な絶縁を実現するために金メッキされたニッケルフリーの非強磁性ピュア銅線による信号導体を採用。渦電流による影響: なし。

入力:

AC電源、RJ45 (ARC用)、ミニUSB (ARC用)

消費電力:

最大: 500W/ch

スタンバイ時: 1W/ch未満

質量:

各40.9kg

寸法(高さ \times 幅 \times 奥行)

154.3 \times 30.2 \times 69.6cm

*仕様は予告なく変更される場合があります。

一般情報

保証

本機は、保証期間内に、日本国内において、取り扱い説明書等の注意書きに従った通常の使用で故障した場合、お買い上げの販売店または当社が無料修理いたします。

保証書および領収書もしくは購入年月日、購入店名を証明できるものを大切に保管してください。

シリアル番号

シリアル番号はスピーカー端子付近に印字されています。各ユニットには、それぞれ固有のシリアル番号があります。

サービス

マーティン・ローガン製品を最初に購入した国以外の国で使用する場合は、以下の点に注意してください。

- 1 マーティン・ローガン指定販売代理店は、その国の販売代理店によって、またはその国の販売代理店を通じて販売されたユニットに限り、該当する保証に基づいた保証サービスの責任を負います。
- 2 最初に購入された国以外の国でマーティン・ローガン製品の修理が必要になった場合、エンドユーザーは、その国の代理店のサービスポリシーに準じて、お近くのマーティン・ローガン販売代理店に修理を依頼することができますが、すべての修理費（部品、人件費、輸送費）は、マーティン・ローガン製品の所有者が負担しなければなりません。

オーディオ用語集

AC: 交流電流の略語。

アクティブクロスオーバー: アクティブなデバイス(トランジスタ、IC、真空管)と何らかの形態の電源を使用して運用するクロスオーバー。

振幅: 信号の振り幅。通常、中心から最大変位までの距離を測定。

アーク: 放電によって発生する可視スパーク。

低域: 最低音域。

バイアンプ: 電子クロスオーバー、またはラインレベルのパスシブクロスオーバーを使用し、高音域と低音域のスピーカードライバーに別々のパワーアンプを使用すること。

キャパシタンス: 端子間の所与の電位差に対して、どれだけの電荷をその中に蓄積することができるかを、電位差に対する蓄積電荷の比によって決定するコンデンサーの特性(ファラッドで測定)。

キャパシター: 絶縁材料によって互いに分離され、電荷を蓄積するために使用される2つ以上の導電板からなる装置。コンデンサーとも呼ばれる。

クリッピング: 切り取られることによる信号の歪み。アンプをその能力を超えて駆動することによって引き起こされる過負荷問題。フラットトップ信号には高レベルの高調波歪みがあり、これがスピーカー内で熱を発生させ、スピーカー部品の故障の主な原因となる。

CLS: 曲線ラインソースの略語。

クロスオーバー: 全帯域幅の信号をスピーカーコンポーネントの目的の周波数帯域に分割する電気回路。

dB(デシベル): 音の相対的な大きさの数値表現。2つの音のデシベルの差は、それらの音の強さの比の10を底とする対数。

DC: 直流電流の略語。

回折: キャビネットの端、グリル枠、その他の類似物など、ある種の機械的干渉によって引き起こされる音波の離散。

振動板: 音波を生成するために電気信号に応答して振動する薄く柔軟な膜またはコーン。

歪み: 通常、望ましい信号と共に存在する駆動信号の望ましくない高調波の割合である全高調波歪み(THD)を表す。一般的に、問題のあるデバイスによってもたらされた望ましくない変更を意味する。

ドライバー: トランスデューサーを参照のこと。

ダイナミックレンジ: デバイスが扱うことができる最も静かな音と最も大きい音の間の範囲(しばしばdBで表される)。

能率: 特定の電気入力に対して供給される音響出力。多くの場合、デシベル/ワット/メートル(dB/W/m)で表される。

ESL: 静電型スピーカーの略語。

ヘッドルーム: プログラム素材のピークレベルとRMSレベルの差(単位はデシベル)。

ハイブリッド: 2つの異なる技術の融合により作られた製品。ここではダイナミックウーファーと静電トランスデューサーの組み合わせを意味する。

Hz(ヘルツ): 1秒あたりのサイクル数に相当する周波数の単位。

音像: 元の音響的イベントの再現性または模倣性。

インピーダンス: 単一周波数の交流電流の流れに対して電気回路によって生じる妨げの程度。抵抗とリアクタンスの組み合わせであり、測定単位はオーム。スピーカーのインピーダンスは周波数によって変化し、一定値ではないことに注意すること。

インダクタンス: 電気回路の電流の変化によって、同じ回路内または近くの回路内に、電圧を発生させる磁界を作り出す特性。測定単位はヘンリー。

インダクター: 主に電気回路にインダクタンスを得るために設計されたデバイス。チョークまたはコイルとも呼ばれる。

線形性: 振幅歪みなしに信号処理プロセスが達成される程度。

中域: 耳の感度が最も良好な中周波数帯。

パッシブクロスオーバー: アクティブなデバイス(トランジスタ、IC、真空管)を使用せず、動作には電源(AC、DC、バッテリー)も不要。典型的なスピーカーのクロスオーバーはパッシブタイプ。パッシブクロスオーバーは、コンデンサー、インダクター、および抵抗器で構成される。

位相: 1つの正弦波が同じ周波数の2番目の波より進んでいる、または遅れている量。違いは位相角という用語で表される。同相の正弦波は互いに強め合い、位相がずれているものは打ち消し合う。

ピンクノイズ: 各オクターブで同量のエネルギーを持つため、測定に使用されるランダムノイズ。

極性: ある基準点または物体に関して正または負である状態。

RMS: 二乗平均平方根の略語。特定の波形の実効値はそのRMS値。音響出力は、RMS音圧の2乗に比例する。

抵抗: 導体によって電流の流れに反対し、導電性材料に熱を発生させる性質。通常はオームで表される。

抵抗器: 抵抗を提供するために回路で使用されるデバイス。

共振: 別の物体から発生した同じ、またはほぼ同じ周波数の振動が強化されることで、ある物体の固有振動数が大きく増幅されたときに生じる効果。

感度: 特定の電気入力に対してもたらされる音量。

固定子: 平面スピーカーの可動振動板の基準を形成する固定部分。

THD: 全高調波歪みの略語(歪みを参照)。

TIM: 過渡相互変調歪みの略語。

トランスデューサー: あるシステムから別のシステムにエネルギーを伝達する各種デバイス。時にエネルギーを形に変換するものがある。スピーカーのトランスデューサーは電気エネルギーを機械的運動に変換する。

トランジェント: 短時間、持続するかその状態を維持するもの。ある定常状態から別の定常状態への変化。

ツイーター: 高域のみを再現するように設計された小型ドライブユニット。

波長: 同じ位相を特徴とする所与の点から、波の進行方向に測定された距離。

ホワイトノイズ: 各周波数で同量のエネルギーを持つため、測定に使用されるランダムノイズ。

ウーファー: 低音域でのみ動作するドライブユニット。2ウェイシステムのドライブユニットは真のウーファーではなく、正確にはミッド/ベースドライバー。



警告: 正規代理店により最初に販売された国以外でスピーカーを使用しないでください。国によって電圧の仕様が異なります。異なる電圧で使用した場合、修理に多額の費用を要する損傷が発生する可能性があります。スピーカーは、販売先の国に応じた電圧設定でマーティン・ローガンの正規代理店に出荷されています。



Lawrence, Kansas, USA tel/tél. 785.749.0133 fax/télé. 785.749.5320 www.martinlogan.com